ウィザーディング・ロイヤル　古き王家と穢れた血

ただの杖振り

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ソロモン王の血を引く最古の魔法族メルフォティート。

その若き王子シュロモを残し、一族は惨殺された。

彼は一族の栄光と繁栄を取り戻す為、ホグワーツに留学する。

※ハリー・ポッター原作（静山翻訳版＆英語版）全作読了済み、映画版ファンタビ含めて全作視聴済みですが、作者独自の解釈や考察を多く盛り込んでいます。また、ストーリーは原作と映画版を参考に考えているので、矛盾が発生する可能性が大いにあります。

※ハーマイオニーはロンとくっつかなきゃ嫌だ！　とか思われる方は是非ともお気をつけください。
※グレート・ブリテンとはイギリスの島全土を含めた魔法社会を示します。
※なまじ日本語訳版の本（静山社翻訳版）っぽくしようとフォントに拘っているため物凄く更新は遅いです。
シュロモのイメージ画像

ウィザードリーでは某シリーズと困惑するのではと思い、ウィザーディングに改題しました。あくまでウィザーディング・ワールドが舞台なので。

目次

賢者の石編
魔法界の王子と穢れた姫 ―――― 1
ホグワーツ特急（前書きに未成年制限法の作中設定あり） ―――― 6
とんがり帽子の組み分け帽子 ―――― 14
ドラコ・マルフォイ ―――― 27
不死鳥のフェニア。ホグワーツの授業（一年生の時間割あり） ―――― 38
怒れる魔女は、寝起きのドラゴンより怖い ―――― 53
魔法薬のマスター ―――― 59
幕間　キングス・クロス駅に着くまでの大騒動。 ―――― 65
友からの忠告と、シュロモの決意 75
初めての箒訓練 ―――― 86
麗しの姫の涙 ―――― 102
ハロウィンにトロールやっつけて地固まる ―――― 116
放課後の魔法薬クラブ ―――― 133
今世紀もっとも偉大な魔法使いと、もっとも尊い魔法使いの密会 ―――― 140

賢者の石編
魔法界の王子と穢れた姫

シュロモ・メルフォティートは忘れない。
――炎に焼かれた家族の苦痛を。
シュロモ・メルフォティートは覚えている。
――一族の晴れやしない無念を。

だから、シュロモ・メルフォティートは決意した。
一族に仇なした賊には然るべき報いを。
そして自分の代で一族にかつての栄光をもたらすと。
魔法界に現存する最古の純血、メルフォティート一族に栄光と繁栄をもたらさんと。

魔法界最古の家系であるメルフォティート一族はシュロモが生まれて間もない頃に、まだ乳児だったシュロモを除き悉く虐殺された。
シュロモはメルフォティートの虐殺を生き延びた唯一の男の子だ。故にウィザー

ディングワールドでは「生き残った男の子」と奇しくもヨーロッパを救った英雄と同じ称号で呼ばれていた。

「困りますシュロモ王子！　不用意に護衛も無しに出歩いてはお命の保障が！」

護衛の闇祓（オーラー）いたちの呼び声をシュロモは無視してダイアゴン横丁の雑多な道を駆け抜ける。

一族を裏切った下手人が誰か未だに解らない以上、不用意に独りになるのは危険だということは良く分かる。

だけど、何となく今日は一人でいたい気分だった。

行く宛も目的もなく、ただ一人になりたいから。そんな理由で走るシュロモに周りを見る余裕なんてなくて。

シュロモは、自分と同じ背丈の子供にぶつかってしまった。

出っ歯がチャームポイントの少女。

「きゃっ」

可愛らしい悲鳴ともに少女は、両手に抱えていた大量の荷物を落としてしまった。

「ごめん、大丈夫？」

ぶつかってしまった少女を転ばないように手を回すとシュロモは少女を支え立たせ

た。そして、地面に散らばった荷物に指を振るう。すると、荷物は独りでに浮き出し少女の手の中に治まった。

汚れてはいないようだ。

良かったと、シュロモは心の中で安心した。

「ぶつかって、すまない。周りを見ていなくてね。怪我はないか？」

「こちらこそごめんなさい。私も周りを見てなかったわショーケースに夢中で。――それより、さっきのは何!?　杖無しで魔法使ってるみたいだったけど！　私マグル生まれで、なにも知らないから本屋さんで教科書を読んだのだけどそんな技術どこにも載ってなかったわ！」

捲し立てるように話し掛けてくる少女に、シュロモは何故か好ましい物を感じた。魔法に対する貪欲さは自身と共通する者がある。パーソナルスペースに、それも異性のそれに容易く踏み入り、顔を不用心にも近付ける姿も、何処となく微笑ましい。

「今のは杖無し呪文（ワンドレス・マジック）。私の、いや俺の故郷では杖は一般的じゃないから俺にとっては特別な技じゃないよ。もっとも、複雑な魔法はまだ杖なしじゃ無理だけど。外国から来たんだ、ホグワーツに留学しにね。俺はシュロモ。君の名前は？　マグル生まれのお嬢さん」

胸に手を当てると、シュロモはキザっぽく歯を見せて笑った。

「ごめんなさい私ったら挨拶も無しに長々と！　私はハーマイオニー、ハーマイオニー・ジーン・グレンジャーよ」
「気にすることはないよ。初めての魔法界にドキドキを抑えられないんだろう？　俺も同じだから分かるよ、その気持ち。自分の国以外の魔法界を見るのは初めてなんだ。ミス・グレンジャーは今は一人？」
　ハーマイオニーは、恥ずかしそうに顔を伏せた。
「その、……色んなことに夢中で、はぐれてしまったの。マクゴナガル教頭先生に案内してもらってたのに」
　紅潮する頬を見るに本気で恥じているだろう。
「奇遇だね。俺もだ」
　本当のところは違うのだ、シュロモは嘘をついた。
　少しでもハーマイオニーと一緒にいるために。
「マヌケな迷子同士、一緒に見て回ろう」
　シュロモの言葉に、ハーマイオニーは笑顔を輝かせる。
「いいの？　ありがとう！　是非とも一緒に見て回りましょう!!」
　何故、初対面のマグル生まれと一緒にいたいと思ったのかシュロモにはわからなかった。だけど、一緒に過ごした時間は、家族が死んだあの日以降のつまらない日々を吹き

飛ばす、楽しくてとても充実した瞬間だった。
セピア色の記憶を吹き飛ばした鮮やかな時間。
魔法界や、ホグワーツについて語る時間は楽しくあっという間だった。

「またホグワーツで会おう。ミス・グレンジャー」
「うん、また会いましょうシュロモ！」
別れるのがとても名残惜しかった。
だが、ホグワーツに通うならまた会える。

「逢引に割って入んなかったことは褒めてやるよ、ドーラ」
「あんなに楽しそうに話す姿を見たら、割って入ることなんて出来ないわ。さ、戻りましょう。魔法大臣がお待ちです」

未だわからない、ホグワーツ生活。
だけど間違いなく充実したものになるだろうと、シュロモは確信した。
願わくば、彼女の隣にいられますように。

ホグワーツ特急（前書きに未成年制限法の作中設定あり）

野暮用のせいで、キングス・クロス駅に着くのが大幅に遅れてしまったシュロモは、ホグワーツ特急に乗り込むのが時間ギリギリになってしまった。

急いで乗ったせいで息も上がってるし、とにかく疲れてる。見た感じ、コンパートメント内はどこも満席で何両も見なきゃいけないのかと、軽く絶望しかけた矢先たまたま空いている席を見つけた。

「失礼、色々とトラブルがあって列車に乗るのが遅れてしまったんだ。ここに座らせてもらっても構わないかな？」

赤毛でそばかすのある男の子と、くしゃくしゃの黒毛の眼鏡の男の子が二人座るコンパートメントだった。

ロン・ウィーズリーは、ハリーが座っていいよと促すのを尻目に、目の前の『獅子』に魅入っていた。

ハリーとは対象的に整えられ黒毛は艶があり光り輝いている。肩まである長い髪を

後ろで束ね、ポニーテールにしていた。
鼻は高く凛としていて、青い目は鋭い意思を感じさせる。
気品と自信に満ちた佇まいに、引き締まった表情は強い誇りを思わせる。おそらく純血なのだろうけど、こんなに気品あふれる魔法使いはこれまで見たことがない。
「僕はハリー・ポッター。ハリーでいいよ。君は?」
ハリーが差し出し手を、男の人が握り締める。
「なるほど、君がイギリス魔法界を救った若き英雄か。私はシュロモ。シュロモ・メルフォティート。君と同じ、奇しくも生き残ってしまった男の子だよ」
「メルフォティートってエルサレムの純血の!?」
ロンは驚いた。ヨーロッパの魔法使いじゃないことは一目で分かったが、現存する魔法界最古の純血だとは思いもしなかったからだ。
非魔法界でも高名な彼の大魔法使いソロモン王の血を受け継ぐ、最も古い一族。
「あぁ、そのメルフォティートで合ってるとも。それで君は何処の誰かな?」
シュロモと、そう自己紹介した男はハリーから手を離すと、ロンに手を差し伸べた。
「マーリンの髭！魔法界の驚嘆を表現する慣用句。ロンはおったまげーでなくＭａｒｌｉｎ☒ｓ　ｂｅａｒｄと言っているが何故か日本語版では無視してまったく別の日本語に翻訳される。英語圏のＯｈ　ｍｙ　ｇｏｄと同じノリ　あ、ごめん。僕はロン、ロン・

ウィーズリー。ロンって呼んで」
有名人が二人もいることに茫然としていたロンは、ふと我に返って慌てて手を握った。
「ロンにハリー、どうぞよろしく」
ハリーの気前の良いおごりっぷりに、シュロモとロンはありがたくご相伴に預かり、3人はお菓子を食べながら談笑していた。そして、丁度エルサレム魔法界について話しているとき、一人の少女がやって来た。

「ねえ、あなたたち。ヒキガエルを見なかった？　ネビルのカエルが逃げたみたいなの」
くしゃくしゃな栗毛の少女は、出っ歯がチャーミングな魔女である。
小さな魔女は、室内にカエルが居ないか見渡すと、魔女の視線に気付いて〝やあ〟と言いたげに片手を上げるハンサムな魔法使いと目が合った。
「やあ、ミス・グレンジャー。5日ぶりだね」
「シュロモ！　会いたかったわ！」
ハーマイオニーは嬉しそうに言うと、勝手にシュロモの隣に座った。シュロモは咎めることはせず、むしろ嬉しそうで、ハリーとロンは少しだけ居心地が悪そうだ。
「色々と話したいことは山々だけど、その前にヒキガエルを探さないとね」

「そうだったわ。ねえ、貴方はネビルのカエルがどこか知らないの？」
「知らないが、私たちは魔法使いだ。魔法を使えば大抵のことは解決できる」
　シュロモが右手の人差し指をドアに向けて横に振ると、入る時にハーマイオニーが閉めた扉が開いた。初めて見る杖なし呪文（ワンドレス・マジック）にハリーとロンは、とても驚いた様子で、ハーマイオニーは再び見る魔法に目をキラキラと光り輝かせている。
　それが面白いのか、あるいは心地良いのか、とにかく3人のリアクションに気を良くしたシュロモは、気取ったように見せびらかすように右手を掲げるとぎゅっと握り、手を開く。
　すると掌に、金色の鱗粉をまとった杖が現れたではないか。
　その杖は、13センチでとても細く、柄にはキリンと不死鳥が彫られている。
　シュロモは杖をしっかりと握ると呪文を唱えた。
「アクシオ（来い）・ネビルのカエル」
　シュロモ目掛けてヒキガエルが飛んでくる。それをキャッチすると、ハーマイオニーに――、
「これが探していたネビルのカエルかな？」
　と手渡した。
「ええ、そうよ。間違いないわ」

「マーリンの髭！　君、杖なしで魔法使えるんだ！」
　ロンは興奮した様子で話し掛けてくる。
「どちらかと言うと杖の方が珍しいからね、私の故郷では。と言っても高度な魔法の時は杖を使うけどね」
　シュロモは片目を閉じると恥ずかしそう言う。
「凄くカッコいい杖だね。それもオリバンダーの店の杖なの？」
　そしてハリーは、シュロモが今しがた仕舞った杖に興味津々のようだった。
「その質問に対する答えはイエスでありノーだ。先祖代々、２０００年以上もの昔から受け継いできた特別な杖でね。とても珍しい木を材料に、特別な芯が使われている。初代オリバンダーの作品だよ」
　シュロモは慈しむように杖を撫でた。この杖はシュロモにとって一族の誇りであり、シュロモの誓いの証でもある。手入れを一日たりとも欠かしたことはなかった。
　しかし、知識欲の権化であるハーマイオニーにとっては、杖も気になるが、それよりもヒキガエルを呼び寄せた呪文の方が重要であった。
「ねえ、シュロモ。これからネビルのところに戻るんだけど、あなたも一緒に来てくれないかしら？　さっきの呪文、教科書に載ってないし教えて欲しいわ」
　目をキラキラとさせるハーマイオニーに、シュロモは強く出れない。

決して、ハーマイオニーと手が触れちゃったから、という理由で断じてはないのだ。
「ハリーとロン。申し訳ないけど、ミス・グレンジャーのところに行っても良いかな？」
「あぁ……、僕はいいけどロンはどう思う？」
ハリーは少し寂しく感じたけど、楽しそうな女の子の邪魔をするのは気が引けたのでロンに任せることにした。
「うん、いいと思うぜ」
初対面だけど、少しハーマイオニーが苦手になったロンは、とくに思うことなく頷いた。
「ありがとう。二人と話せてとても楽しかった。二人とも、それじゃ、また」
ハリーとロンと、握手するとシュロモは席を離れた。

「ごめんなさい。私ったらつい夢中で。良かったの？　私と一緒についてきて」
列車の中、シュロモと並んで歩くハーマイオニーは、しゅんとして謝った。よくよく考えたら、楽しそうに談笑しているのに割って入って、さらに我儘を言って引き離すなんて、なんてことをしたのだろう。
「気にすることはないさ。確かに楽しかったけど、女の子と。それも知的でステキな女の子と話す方が何千倍も楽しいに決まってる」

「あら、ありがとう。そう言えば、さっき聞いたんだけどもう直ぐホグワーツに着くから、コンパートメントに着いたら着替えた方がいいわよ」

シュロモの口説き文句に、頬を緩めつつハーマイオニーはスルーした。シュロモは息を吐くようにお世辞を言うのだ。いちいち気にしていたらキリがない。ハンサムに面と向かってステキと言われれば、多少ニマニマしてしまうがそれだけだ。

悲しきかな、シュロモの本当の言葉は、カッコつけたがりな性格と言動が災いして、ハーマイオニーに届いていなかった。

「着替えのことならお気になさらずメシハ―。何度も言うが、魔法使いには――魔法がある。

ヴェスティメンティア(服)(よ)」

今度は杖を出さずに、指を腰から胸までなぞるように這わせながら呪文を唱えた。

するとシュロモのフロックコートが上の方から、崩れていきみるみるホグワーツの制服に変わっていった。

「シュロモ、あなた凄いわ!」

早着替え魔法を見て、当然ながらハーマイオニーは目を輝かせる。

「これも教えてあげるよ」

ハーマイオニーの純粋な尊敬の眼差しに、シュロモはちょっとだけ照れた。

狙ったとは言え、女の子からの尊敬の眼差しは男としてとても嬉しいものだ。

二人は、ホグワーツに着くまでの僅かな時間をとても楽しく過ごすのであった。

とんがり帽子の組み分け帽子

「良く来たなイッチ年生、こっちだほら。こっちに来い！」
半巨人のハグリッドが一年生を、呼び集める。
とても大きい毛むくじゃらな大男で、髭もじゃだ。だが、その奥にある瞳はつぶらで優しく光っている。
ハリーと出会い再会を喜ぶハグリッドは、ちらりとハーマイオニーの隣に並ぶシュロモに目をやりウィンクをした。シュロモも、ハグリッドにウィンクを返す。
それを見ていたハーマイオニーはシュロモに質問した。
「あなたあの人と知り合いなの？」
「実家のあれこれでちょっとね。彼はルビウス・ハグリッド。森番で、魔法動物のスペシャリストだ」
「へぇ、あなたが言うのならよっぽど凄いのね」
「言っとくが、俺が得意なのは魔法を扱うことで、魔法生物は門外漢だよ？」
「あら、けれどあなたとっても凄い動物を飼ってそうな気がするわ。あの二人は見逃してたみたいだけど、私あなたの杖の柄にキリンと不死鳥が彫られてるのをこの目で見た

もの。代々受け継いでるってことは、一族に所縁(ゆかり)があるんじゃないかしら？」
「……なんのことかさっぱりわからないな」
鋭いハーマイオニーの指摘を、シュロモは誤魔化しながら集団について行く。
だが、ハーマイオニーの質問は、小舟に乗っても続いていた。
「ねえ、あなたの杖もそうだし、あなた私に何か隠してることあるでしょ？　苗字(ラストネーム)を聞いてもはぐらかすし――」
「お、あれを見ろ！」
シュロモは分かり易く、別な場所を指差して誤魔化す。
「誤魔化そうとしてもそうは……わああぁ」
あれを見ろ、と言われたら向きたくなるのがヒトの悲しき性(さが)であり、その悲しき習性は魔法族であろうと変わらない。
何もないだろうなと思いつつ、シュロモの指差した先を見つめると――。
ハーマイオニーは口を両手で押さえて、素直に驚いた。
驚くほど透明で深い湖の先に、丘の上にそびえたつ大きな城があったのだ。
聖堂のような建築物と、中世の城を合わせたゴシック調の巨大建築で、天空を突き刺

すように尖塔が幾つも伸びている。
窓からこぼれる光が星のように城を明るく照らしている。
美しくも荘厳な、魔法使いたちの学び舎。
ハーマイオニーは、シュロモへの追求を忘れて、これから7年間過ごすことになる第二の家に見入っていた。
「これらがスリザリンが我らに見せたかった城か……素晴らしいな」

※

ボートを降りた新入生たちは、厳格そうな老婆ミネルバ・マクゴナガル教頭に引き連れられ、広大な城の中を歩いていた。

「ようこそホグワーツへ。さて、みなさんはこれからこのドアをくぐり上級生たちと合流しますが、その前にまず、皆さんがどの寮に入るか決めなければなりません」
勇気溢れる騎士道精神のグリフィンドール。
努力と忠誠を重んじる、献身のハッフルパフ。
叡智求める、探求者のレイブンクロー。

そして、知恵と狡猾さを重んじる気高き団結のスリザリン（蛇の寮）。

偉大なる４人の創始者が遺した４つの寮に組み分けされるのだとマクゴナガルは、新入生たちにそう言った。

「どれもとても素晴らしい寮で、素晴らしい魔法使いや魔女を輩出してきました。ホグワーツにいる間は寮が貴方がたの家になります、そして寮生はみなさんの家族と言えるでしょう。良い行いをすれば寮の得点になり、逆に規則を破ったりすれば減点されます。年度末に、一番得点の高い寮には優勝杯が与えられますので、皆さん是非とも頑張るように。くれぐれも、寮の名誉を損なうようなことをしないでください」

鋭い目付きで、新入生たちを見渡すと、マクゴナガルは少しだけ離れた。

「ねぇ、シュロモ。あなたはどの寮に入ると思う？　そもそもどうやって寮を決めると思う？　もしかしてテストをするのかしら？　テストだったらどうしよう」

「組み分けの方法はてんで見当がつかないな。俺は多分、レイブンクロー……もしくは――。まあけど君が入りそうな寮なら検討がつくな、ミス・グレンジャー。君はレイブンクローかグリフィンドール、この二択だよ。組み分けだけど、テストはない、と思うな。マグル生まれがいるわけだし、それでは公平さに欠く」

「あら、そう？　けどそうね。私も入るならレイブンクローかグリフィンドールだと思うわ。何をするのかしら、緊張してきたわ」

と、そこでマクゴナガルが戻ってきた。新入生全員が揃っていることを確認すると、宜しいと頷き。

「では、組み分けの儀式が始まります。ついて来なさい」

歩きだした。

マクゴナガルが近付くと、ドアが一人でに開き、大広間の中が明らかになった。

大広間は、それはもう素晴らしい空間だった。

長い机が４つ並べられ、上級生たちが寮ごとに分かれてところ狭しと座っている。

空中には何百ものロウソクが浮かんでいて、机を爛々と照らしていた。

壁には、ホグワーツの校章が彫られていて、４寮の動物たちは今にも飛び出してきそうなまでに精巧に彫刻されていた。

そして何よりも驚くのが、大広間の天井だ。

本来なら石造りの天井が広がっている筈のそこには、それはもう見事な満天の星空が広がっていた。

「星空じゃなくて、天井よ。魔法で空が広がっているように見せているだけ。ホグワーツの歴史にそう書いてあったわ」

とはハーマイオニーの説明である。

魔法のかけられた天井を見て、シュロモは遥か遠くの故郷にある、己が城を思い浮か

べた。

とても素晴らしい魔法に、多くの新入生たちが釘付けになるが、ハーマイオニーとシュロモはいちはやく、先生たちが座るテーブルの前に、3脚椅子が置かれていることに気が付いた。

そして、その椅子の上には古くてくたびれた山高帽子が置かれていた。

怪しいなと思って目を凝らしたシュロモは、直ぐに驚くことになる。

「驚いた。あの帽子、魔法がかけられている。しかも、あの魔法は、――なるほど犬猿と言われはするが、仲が良かったのか」

「どうしたの？　そんなに驚いた顔をして」

「いやなに、何でもない。それよりも、何か始まるぞ」

場違いな帽子に、新入生たちの視線が自ずと集まる。

帽子がぴくりと震えると、つばの部分が口のように動き出し、帽子が急に歌を唄い出した。

「私はきれいじゃないけれど
　人は見かけによらぬもの
　私をしのぐ賢い帽子

あるなら私は身を引こう
山高帽子は真っ黒だ
シルクハットはすらりと高い
私はホグワーツ組み分け帽子
私は彼らの上をいく
君の頭に隠れたものを
組み分け帽子はお見通し
かぶれば君に教えよう
君が行くべき寮の名を

グリフィンドールに行くならば
　勇気ある者住まう寮
　勇猛果敢な騎士道で
　他とは違うグリフィンドール

ハッフルパフに行くならば
　君は正しく忠実で

忍耐強く真実で
　苦労を苦労と思わない

古き賢きレイブンクロー
　君に意欲があるならば
　　機知と学びの友人を
　　ここで必ず得るだろう

スリザリンではもしかして
　君はまことの友を得る
　　どんな手段を使っても
　　目的遂げる狡猾さ

かぶってごらん！恐れずに！
興奮せずに、お任せを！
君を私の手にゆだね（私は手なんかないけれど）
だって私は考える帽子！」

帽子が歌い終えると、先生たちだけでなく、新入生上級生も皆拍手した。ハーマイオニーも、そしてシュロモも拍手を送る。

「組分けの方法が分かったね。被れば良いんだ」

ハーマイオニーの緊張が少しだけ楽になった。

「では、皆さん。名前を呼ばれた生徒は前に出るように、帽子を被せます。アボット、ハンナ！」

ＡＢＣ順に生徒が呼ばれ、次々と組分けされていく。

そして遂に、ハーマイオニーの番になった。

シュロモはレイブンクローに組み分けされることを祈った。シュロモは自分に、グリフィンドールの適性があるとは思っていなかったし、入れるとも思っていなかったからだ。

もし、グリフィンドールに組み分けされれば一緒の寮で過ごすことは叶わない。

無論、どの寮に入ろうとも、シュロモはハーマイオニーとの交流を絶つつもりはないが、出来れば同じ寮で過ごしたいというのが偽りなき男心である。

だが、運命は無常であり、帽子は悩み悩み抜いた末

「これは難しい。ならば……グリフィンドール!!」

ハーマイオニーをグリフィンドールに組み分けしてしまった。

シュロモはがっかりしたが、決して顔に出さず、シュロモに向けて笑みを浮かべるハーマイオニーに微笑み返した。
残念ではある。非常に、物凄く。
だがあまりショックに沈んでいられない。
ついにMの番が来た。
「メルフォティート、シュロモ！」
シュロモは一歩前に出た。
「メルフォティートだって？　あのエルサレムの？」
「ポッターと同じ『生き残った男の子』か」
マグル生まれの新入生を他所に、ざわめきが広がった。
遠く離れた異国の地の悲劇とはいえ、悲惨さと時期、そして被害者の家柄もあり、グレート・ブリテンに広く知れ渡っている。一歳にも満たない男の子を除いて一族みな殺されたのは、あまりに悲惨でブリテンの英雄ハリー・ポッターに近しい何かがあった。
だが、純血の、それも由緒正しく裏事情に精通する聖２８一族は、別の意味でも驚いていた。
「何で、あのメルフォティートがヨーロッパに？」
長い歴史の中で起きたヨーロッパ魔法族とメルフォティート一族との確執は、多くの

血を流した悲惨な歴史であった。両者、特に後者の恨みは大きいはずで、安全を求めるにしてもアジア圏に亡命するだろうと聖２８族は予想していた。

なのに、メルフォティートの御曹司、魔法界の若き王子は、今こうしてホグワーツの地を踏み、新入生として立っている。

魔法史に目を通したであろうハーマイオニーが、驚きの目を向けてくるのに、シュロモは胸に手を当て表情を歪めることで謝罪の意を示した。

ハーマイオニーはぷいっとそっぽを向いた。

許してもらえなかった。

気を取り直して椅子に座ると、マクゴナガルは帽子を被せた。

「どの寮に入っても応援していますよ、シュロモ」

とても小さな耳打ちにシュロモは笑みを浮かべる。

「ありがとう、ミネルバ」

ばさりと帽子が被らされた。

たちまち視界が真っ暗になる。

「ふ～む。非常に難しい。実に難しい、実に実に難しい。君たち一族がこの城に来る日を創始者たちはずっと待ち望んでいたよ。エルサレム城の太古の秘術を学び、君たち一族に師事したスリザリンは特に。――話はそれたが、君には創始者たちが望む素質がす

べてある。どの寮に入っても君は間違いなくやっているける」
優しくも深い声が頭の中に響いてくる。
そして、帽子は心の深いところを見透かしている。
溢れんばかりの自信と。
溢れんばかりの不安がせめぎあい、自負と誇りが入り混じった心の奥底を帽子は視ている。
「勇気もある、野心もある。それに才能に満ち溢れている。帽子としては、スリザリンかレイブンクローの2つを奨めたい。もちろん君が望めばどの寮でも輝くことが出来るが、レイブンクローに入れば君は更に魔法の道を究められるだろう。そして、スリザリンに入れば君は間違いなく偉大な魔法使いになれる。……グリフィンドールも君が望めばその門戸を大きく開けて歓迎してくれる。だけど他ならぬ君が無理だと思うのに入れるなんて酷なことをこの帽子はしやしない。——私にゆだねてくれるのだね、ならば——宜しい」
匙は投げた。
己が心の内はすべて見せた。
帽子ならば、己を相応しき道を拓いてくれる。
「スリザリン!!」

ハリー程とは言えないが、少なくない歓声がスリザリンから上がる。
何故、メルフォティートがヨーロッパに来たのかは分からない。だが、由緒正しい純血であり、ともすれば聖２８一族よりも歴史が古く権威のあるメルフォティートの王子を獲得できたのは、スリザリン寮の格と名誉を高めることに他ならない。
スリザリンと言われて、悲しそうな目をしたハーマイオニーにウィンクをすれば、ハーマイオニーは気付いて苦笑した。
握手を求める先輩方に応じ握手をしながら、シュロモは席に着く。
「シュロモ・メルフォティート。同じ寮になれて光栄だよ」
ブロンドヘアをオールバックにした少年が、握手を求めてきた。
顔は青白いが表情は凛としていて、尖った顎が特徴の少年。
「こちらこそ。ミスター？」
シュロモの疑問に、ドラコはしまったと、すぐさま名乗った。
「失礼。ドラコだ。ドラコ・マルフォイ。僕のことはドラコと呼んでくれ」
「ドラコ。こちらこそ、私のことはシュロモで構わないよ」
ドラコの手を取り、シュロモとドラコは固い握手を交わした。

ドラコ・マルフォイ

ドラコ・マルフォイはシュロモとの握手を解くと、シュロモの佇まいをありありと観察した。

『生き残った男の子』

奇妙なことに、名前を言ってはいけない例のあの人を打ち倒したグレート・ブリテンの英雄と同じ異名を持つ少年は、ドラコからしても唸るほど佇まいや所作が洗練されていた。

同じ１０歳でありながら、既にエルサレムの新たなる指導者『王』に就任することが決まっているだけはあり、椅子に座る背筋はピンと伸びていて美しい。

シュロモに流れる血の権威と影響力を鑑みれば、シュロモと仲良くすることはマルフォイ家のグレート・ブリテンにおける地位はおろか国際魔法社会での地位をも盤石にしてくれるだろう。

シュロモがホグワーツに入学することは事前に父から知らされていたので、さして驚きはない。

だが、同時にマルフォイは父から、もしシュロモがスリザリンに入ることがあれば、何

かと便宜を図り良くしてあげるように言われていた。
だから、ドラコは慎重に言葉を選んで声を掛けた。
「父上から、君がスリザリンに入ったら何かと手伝ってあげるように言われていてね。まるっと違う異国の地で、慣れないことが多いだろうし、困ったことがあれば遠慮なく僕を頼ってくれシュロモ」
ドラコの申し出を、シュロモは嬉しそうに受け入れた。
「それはとても助かるよ、ドラコ。まるっと文化が違うから、教えてくれると非常に助かる。まったく君のお父さんといい君といい、マルフォイ家には感謝しかないよ」
打算抜きに、ドラコの申し出はシュロモにとって嬉しい物だった。
ルシウス・マルフォイとファッジ大臣が尽力したおかげで、シュロモはロンドンで安全に暮らすことが出来ている。
ルシウス・マルフォイとは直接の面識はないが、いずれ会ったらお礼をしなければとシュロモは決意した。
家族愛の強いドラコは、敬愛する父が褒められて嬉しくなった。
「あとで父上に手紙で伝えておくよ。どうやら僕たち、良い友人になれそうだ」
「私もそう思うよ」
二人の友情が芽生えた瞬間だった。

二人の交流が温まってきたところで組分けが終わり、背が高い老人が立ち上がった。髭と髪は真っ白で、足下に届きそうなまでに伸ばしている。二度折れ曲がった鼻の上に掛けている半月メガネから覗く瞳は理知的で、生徒たちを優しく見守っていた。

ホグワーツ魔法魔術学校校長のアルバス・ダンブルドアだ。ダンブルドアが立ち上がる瞬間、ちらりとシュロモを見て微笑み、それから何事もなかったかの様に立ち上がった。

「ホグワーツの新入生の諸君、入学おめでとう！　上級生たちはおかえりなさい！　さて、歓迎会を始める前に儂から二言、三言、言わせていただきたい。ではいきますぞ。そーれ！　わっしょい！　こらしょい！　どっこらしょい！　原文はＮｉｔｗｉｔ！　Ｂｌｕｂｂｅｒ　！Ｏｄｄｍｅｎｔ！　Ｔｗｅａｋ！　であり正確に訳そうとうするならば、（アホ馬鹿間抜け、泣き虫、変わり者の未熟者！）といきなり罵声を浴びせるキチガイ爺になる。ユーモアがどこかズレてる魔法族の例に漏れない、偉大魔法使いなりの気を紛らわすユーモアなのだが、いきなり日本読者が読むと困惑するので意訳されたのだろう。作者は、この訳を非常に秀逸な訳だと思っているので某社へのリスペクトとしてそのまま流用する。　以上！」

ダンブルドアのおかしな挨拶に大広間がどっと沸いた。

スリザリンの席ではまばらであったが。

「あれがダンブルドアだよ。父上はいつもまともじゃないって言ってる。けど、確かにイカれてるな」

「少し、だいぶ個性的なことは認めるが、あまり悪口は感心しないな。間接的にでは、あるがダンブルドア校長が頷いてくれたから私はこの地に来たんだから」

とシュロモは言うが、あれが校長としての挨拶ならば――。

残念ながらイカれてると言わざる得ない。

シュロモにとってはそうかと思ったドラコは、シュロモの肩を叩きテーブルに注意を促す。

「ご馳走の時間だ。食べよう」

ダンブルドアの独創的な挨拶に気がとられているうちに、いつ間にやらテーブルに並んだ金の皿にご馳走が配膳されていた。

シュロモは、それに驚くことなくナイフとフォークを使い、優雅に食事をした。

洗練されている中々のマナーに、観察していたドラコは感嘆の息を漏らす。

「中々のものじゃないか。シュロモの故郷では、ナイフやフォークは馴染みがないと聞いていたから、教えてあげるつもりでいたけど、見事なものだよ」

「護衛の闇祓いに教わったんだ。少なくとも7年の大半をここで暮らすからね。慣れな

いと食事すらままならないだろう？　私は食事が好きなんだ」
「それは言えてるな」
下品にならない程度に、シュロモとドラコは談笑して友誼を深めた。
そこで、一つ小さな騒動が起きた。
何気なくシュロモは手にしたナイフを置いて、離れた大皿に載せられた七面鳥の丸焼きに手を伸ばした。そして、指を軽く何度か揺らす。すると、大皿の手間に置いてある丸焼きを切り分ける用のナイフと皿の上の丸焼きが宙に浮かんで、ナイフが丸焼きをシュロモが食べたい大きさに切り裂いた。切り分けられた肉は宙に浮かび、残りの丸焼きは大皿の上に戻った。
シュロモが再び指を振るうと、切られた肉が皿の上に乗る。それをシュロモは美味しく食べ始めた。
食べながらシュロモはフォークを持った方の手の小指をくいくいと動かした。
それだけで、別の大皿に載っていたサラダやフルーツが、シュロモの皿に飛んで来た。
それを見ていたドラコたち新入生の他、上級生たちも等しく驚いていた。
「嘘、杖なしで魔法を使ってるわ！」
「杖なし呪文（ワンドレス・マジック）だと!?　熟練の魔法使いにしか使えない高度な魔法な筈なのに、新入生がどうして!?」

「杖がないだけじゃなく、呪文も言ってないや、すげぇ！」
　その驚きの光景は、スリザリン生だけでなく、他の寮も、先生たちも見ていて、大広間全体がざわついている。
「これが父上が言っていた常識の違いってやつか」
「高度な魔法を使うときは杖を使うけど、物を取るくらいなら詠唱も杖も必要ない。その代わりに箒がてんでダメだけどな」
「あァ、そう言えば絨毯があるんだっけか？」
「そう、絨毯に乗るか魔法動物に乗るかの二択だ」
　あらかじめ事前情報と、予備知識のあったドラコは驚きはしたが、取り乱すことはしなかった。
　ちょっと驚いた後、普通に食事を再開し会話をしている。
　周囲の喧騒をシュロモはＢＧＭに、ドラコはこんな奴と最初に仲良くなったんだぞという優越感のエサにして食事を楽しんだ。途中、ゴーストたちがシュロモに挨拶しに来ると言う、追加の珍事件が発生したがメルフォティートも学校のゴーストも相応に古いので何か縁があったのだろうとドラコは気にしなかった。
　そんな喧騒をダンブルドアは爆竹音を二度打ち鳴らすことで鎮めると、席から立ち上がった。

すると、お皿の上にあった食事が、すべて消えてしまった。
「さて、みなよく食べてよく飲んだじゃろうから、お腹が膨れて眠くなる前にもう2，3言注意事項を述べさせてもらおうかの。まず一年生のみなに連絡じゃが、校内にある『禁じられた森』に入ってはいけませんぞ、許可なくの。そして、これは何人かの上級生にも当てはまることじゃ」
そこでダンブルドアは一度言葉を切って、グリフィンドールに座る何人かの上級生をちらりと見た。
「では次の注意事項じゃが、管理人のフィルチさんから授業の合間で魔法を使わないようにと注意があった。悪戯グッズについても同様じゃ、廊下で決して使わんようにの。持ち込み禁止リストがフィルチさんの事務所に貼っておるので目を通すとよろしい。ああ、それと二週間後にはクィディッチの予選があるから、寮のチームに参加したい人はマダム・フーチに連絡するのじゃ。よいな？」
「――では最後にじゃが、とても痛い死に方をしたくない人は、今年いっぱい四階の右側の廊下に入ってはいけません。そこには恐ろしい苦しみと死がまっておる。以上じゃ」
「君に言われた手前気が引けるけど、やっぱり僕にはイカれてるとしか思えないな」
「今後の友情の為に私は聞かなかったことにするよ……」
二人は、こそこそを顔を寄せて囁いた。

「さーて、みなもそろそろ眠くなった頃じゃと思うが、ふかふかのベッドに飛び込む前に校歌を歌いましょうぞ！」

ダンブルドアは立ち上がると声を張り上げる。

そして、杖を細かく振るうと杖の先から金の光のリボンが飛び出して、くねくね空中を這うと文字になる。

「思うがままに歌うが宜しい、メロディもリズムも自由じゃ。――では、行くぞ。いちにのさんはい！」

生徒だけでなく、教授陣も――大広間の全員が立ち上がると一斉に歌い始めた。

「ホグワーツ　ホグワーツ♬

ホグホグ　ワツワツ　ホグワーツ

教えて　どうぞ　僕たちに

老いても　ハゲても　青二才でも

頭にゃ何とか詰め込める

おもしろいものを詰め込める

今はからっぽ　空気詰め

死んだハエやら　がらくた詰め

教えて　価値のあるものを

教えて　忘れてしまったものを
ベストをつくせば　あとはお任せ
学べよ脳みそ　腐るまで♪」

飛び切り遅いのは、グリフィンドールの赤毛の双子で、ドラコは伝統的なイングランド民謡風に歌っていた。

かくいうシュロモは、自由に歌えとのことなので軍隊行使曲風に歌い終える。

赤毛ツインズブラザーズがとにかく遅く、ダンブルドアは二人が歌うのに合わせて指揮を執った。

二人が歌い終えるとダンブルドアは、はちきれんばかりの拍手をした。

「音楽じゃ」ダンブルドアの瞳から涙がこぼれる。「音楽まさに何ものにも勝る魔法じゃ。素晴らしい……おっと、歌っとる間に眠る時間になってしもうた。そ～れ、駆け足じゃ！　ほれほれ」

スリザリンの監督生、コロント・ワンダースウィングは、立ち上がると声を張った。

雪原のような銀髪の魔法使いで、背が高い。

深く落ち着いた声で、騒がしくなった大広間でも彼の声は良く響いた。

「栄えある新たなスリザリンの諸君！　我らが寮（スリザリン）の談話室まで案内する、ついて来たま

え」

女性の監督生と共に、コロントは一年生を先導する。

レイブンクロー生やグリフィンドール生が階段を登るなか、コロントは一年生に注意を促した。

「間違えて階段を上がらないように。スリザリンの談話室は地下にある。ついでに言うが、ホグワーツの階段はじっとしていない、下手に登ると大変だぞ。さて、こっちだ」

そう言うと、コロントは階段を降りていく。

「純血に栄光あれ」

コロントがそう唱えると、何もなかった壁が動いて、中から蛇が彫刻された扉が出てきた。

扉の中に入ると、荘厳な地下室がスリザリンたちを出迎える。

天井や壁に窓があり、窓ガラスの向こうには湖が広がっていた。

天井を見ると、丁度オオイカが通り過ぎるところだった。

沈没した船の中にいるような、幻想的な落ち着いた品のある空間。

緑色のランプが、談話室の闇を照らしている。

「見ての通り、ここは湖の地下だ。時折、水中人（マーピープル）やオオイカの泳ぐ姿が見える。あそこに

ある棚に、偉大なる先輩方が我らの為に残した知恵がある。スリザリンの誇りを穢さぬように、勉学に励みなさい。……さて、もう夜遅い。荷物はもう寝室に届いているから――もう寝なさい。良い夢を」

割り振られた寝室は、二人部屋であったが、とても広く調度品も立派で高級ホテルの様な内装だった。

シュロモとドラコは、同じタイミングでベッドに飛び込んだ。

ベッドはとても柔らかく、雲の上はこんな感じだろうと想像させる程ふかふかで体を優しく包み込む。

「おやすみドラコ」

「おやすみシュロモ」

二人はあっという間に眠りに落ちた。

不死鳥のフェニア。ホグワーツの授業（一年生の時間割あり）

雲のようにふかふかなベッドの誘惑を振り切ったシュロモは、ホグワーツの制服に袖を通すと寝室を出る。

本棚の隣の長机に、たくさんの紙が並べられていて、『新入生用！　感謝して受け取る様に』と魔法で金色に文字が輝く張り紙が壁に貼られていた。

何事かと見てみると、大広間や教室など良く使う場所への最短ルートや階段に関する諸注意がまとめられたホグワーツの校内の地図が並べてあった。新入生の人数分ぴったりに。

「スリザリンの先輩方は随分と指導熱心なんだな」

「おはようシュロモ。ド派手な張り紙が促してるのはこの地図かい？」

着替え終わったドラコも、張り紙を見るなり地図を受け取りにやってきた。

「図書の充実ぶりと言い、この地図といい、先輩たちは随分と優しいんだな。こんなに充実したフォローを受けれるとは……スリザリンに入って良かった。ステキな先輩方には頭が上がらんよ」

「あぁ、まったくだ」
後輩の為に一人一個作成されたスリザリン謹製の地図を受け取るとは凄まじい熱量である。
栄えあるスリザリンの名誉を穢さぬためであろう。スリザリンともあろう者が授業に遅刻するなど言語道断！
先輩たちの副音声が聞こえてきそうだ。
ドラコの腰巾着であるクラッブとゴイルとも合流すると、四人は大広間に向かった。
「あれがメルフォティートの王子（プリンス）さま？　早速マルフォイ家と手を結んだのか？」
「一族みんな焼き殺されたんだって……相当恨まれてたんだね」
寮を出て玄関ホールを過ぎるなり、シュロモに囁き声と悪意が付き纏った。
とくに純血の出身がシュロモに強い関心があり、爪先立ちで見るのは序の口で、平然と陰口や心無い悪意を囁いていた。
「僕がはっきり一言言ってやろうか？」
と、シュロモの顔色を伺うドラコ。
だが、シュロモはあっけからんとしていた。
「いいよ、無視で。本国にいた頃から慣れてる。持たざる者からの僻みということで聞き流そう。お互い君臨する者同士、これくらいは心を広くして聞き流そう」

「君がそれでいいなら、仕方ないな。……てっ、クラッブ！　こっちだ！　階段を上がってどうする！」

クラッブが間違えて右へ行き、階段を上がろうとするのをドラコはすんでの所で阻止した。

「それよりも私は君の方が心配だよ、ドラコ。余計なお世話なのは重々承知の上で言うけど、付き人がその二人でよく我慢できるな」

「……これでも幼馴染だ。放っておける訳ないだろ」

「――君は良くできた魔法使いだな」

プライドの高い金持ちのお坊ちゃまだが、中々どうして情に厚い良い奴だなとシュロモは思った。

大広間に着くと、昨夜と同じバイキング形式の朝食が長テーブルの上に並べられていた。

昨夜は理路整然とした座りだったが、見渡すと寮ごとに分かれてるだけで、自由に座っているようだった。

「ここに座って良いかい？」

とドラコが、パグ犬のような女子に話しかけた。

「ぜひ座って、ドラコ」
キーキー高い声で、少女は了承した。
心なしか頬が紅潮している。どうやら、互いに見知っているようだ。
そして、キーキー声の女児が、ドラコにどんな想いを描いているのか、シュロモは察した。
「ありがとう、パーキンソン。シュロモ、クラッブ、ゴイル。座れるぞ」
シュロモたちが据わると、ドラコはパンジーに話し掛けた。
「パーキンソン、御存知ミスターシュロモ・メルフォティートだ。シュロモ、こちらがパンジー、パンジー・パーキンソン。聖２８一族の一人、由緒正しい純血だよ」
「紹介ありがとうドラコ。ミス・パーキンソン、シュロモ・メルフォティートだ。レディと一緒に食事ができるなんて嬉しいよ。これから７年間、よろしく頼む」
シュロモは柔らかく微笑むと手を差し出した。
パンジーは、ハンサムにレディと言われ嬉しそうに頬を緩ませながら、シュロモと握手した。
「あら、ありがとう。７年間、よろしくね」
わざと素っ気なく言うが、内心小躍りしてるパンジーはすまし顔で朝食を再開した。
パンジーを交え、これからの授業や家のことについて談笑していると、突如としてふ

くろうの鳴き声が大広間に響き渡った。
そして、専用の入り口から、大量のふくろうが大広間に雪崩れ込んだ。
ふくろう便の時間である。
魔法使いの飼うふくろうはとても賢く、訓練されていて、郵便物を届けるインフラの役目を担う重要な生き物だ。何百羽というふくろうが、郵便物を生徒たちに届ける様は実に圧巻である。
ドラコにも、パンジーにも、クラッブとゴイルでさえも何かしらの郵便が送られ、ふくろうが頭上から落とす荷物をワクワクした様子でキャッチしていた。
あっ、とシュロモは形の良い眉を顰めた。
これから見れる光景と、それがもたらす光景がありありと想像できたからである。
まず間違いなく大広間中から注目されるだろうが、もう仕方のないことだとシュロモは割り切って朝食を再開した。
――次の瞬間、大広間の空中に炎が燃え広がった。
甲高い鳴き声と共に、炎の中から大きな鳥が飛び出て来た。
真紅の体毛に覆われた鷲にも鶏にも似た鳥で、孔雀のように長い尾羽が空中でたなびいている。
くちばしとかぎ爪も金色に光り輝いていて、尾からまったく熱くないし燃え広がらな

い火の粉をまき散らしている。

魔法省分類ＸＸＸＸ　魔法動物の分類。Ｘの数で危険度もしくは飼い慣らす難易度を表す。ちなみにこの場合は危険度でなく飼い慣らした魔法使いが殆どいない故の分類。の動物――不死鳥（フェニックス／Ｐｈｏｅｎｉｘ）である。

不死鳥は大広間を一度旋回すると、シュロモの頭上で手紙を落とし、シュロモの直ぐ近くに降り立った。

「フェニア、御苦労」

シュロモの労いに、フェニアと呼ばれた不死鳥は嘶くことで返事とした。

「不死鳥を飼っているのかい!?」

と、ドラコは思わず大声を出した。普段なら下品であると先輩方が良い顔しないだろうが、幸いなことに先輩方も不死鳥が郵便物を届けるという異例事態に困惑して咎める様子はない。

「凄い生で見るのは初めてだわ！　あなたの家で飼ってるの!?」

とは、パンジー。ある意味、一番冷静だったのはパンジーだった。

パンジーは、フェニアの真紅の艶やかな毛並みに見惚れていた。

「美しいだろう。初代ソロモンがエジプトの姫を娶った際に王宮から献上されて、以来一族に仕えてくれている。２０００年以上生きる、おそらく最高齢の不死鳥だよ。一族

の象徴にもなっている」
シュロモはそう言いながら、手紙の封を切り、中身に目を通した。
「流石はドラコの父上だ。理事だけあって耳が早い」
「……父上はなんと？」
正直、シュロモの不死鳥に興味津々なドラコだったが、父からの手紙と聞いては意識を向けざるえなかった。ドラコは多少捻くれているが家族愛が強いのだ。
「私がスリザリンに組み分けされたことをもう知ってるようだ。ドラコを思う存分こき使ってやってくれとある。ははは、君の父上は強かだな。……それに、凄く頭が回る」
最後の2、3行。さらと書かれた文章に目を通すとシュロモは手紙をとんとんと指で叩いた。
すると手紙が激しく燃えて、あっという間に灰となった。
「返信を書くから、書き終え次第届けてくれ。それまで休むといい」
と、くちばしを撫でながら、シュロモは教職員席を見た。
こちらをじっと見ているダンブルドアと目が合った。
フェニアは嘶くと、燃え上がり、炎が消えると、そこにはいなかった。

「さてと、授業に行こうか？」

「……そうだな。そうしよう」
何事もなかったようにシュロモは言う。ドラコは色々と言いたいことを飲み込むと、目まぐるしく変わる事態についていけず目を回していたクラッブとゴイルを急かし立ち上がらせた。
パンジーも朝食を食べ終え立ち上がる。
シュロモとマルフォイ、クラッブ＆ゴイル、紅一点のパンジーが去った直後に大広間はかつてない喧騒に包まれたのは、関係のない話だ。衝撃の余り、衝撃を共有するのについい夢中になって授業に遅れる者が続出してしまったり、再起動した先生たちの注意が飛び交うのも、まったくもって関係ないったらないのだ。
「ねぇ、あとで不死鳥を撫でても良いかしら？」
「女性の君なら問題ないと思う。彼はああ見て女好きだからな」
ドラコはこめかみを押さえた。

※

ホグワーツの授業は、同年代に比べて圧倒的に多くの魔法を修めているシュロモにとってもとても実りのある素晴らしい授業だった。

はっきり言って、一族のノウハウがほぼゼロな魔法薬草学然り。

小鬼（ハーフ）の魔法使い、フィリウス・フリットウィック教授の呪文学の授業然り。これまで魔法は、生家であるエルサレム城に飾られた壁画たちから学んでいたシュロモにとって、フリットウィック教授の授業は、杖の先から蝶がダース単位飛び出てくるのでは杖の先から蝶が出る：目から鱗の魔法界バージョン。変身術が苦手だと思っていた魔法使いがある日、急に絶好調になって杖の先から蝶を出せるようになり変術が得意になったことから、「新しい発想をえること」や「人生を変えるほどの影響」を意味する。調子に乗って作ったオリジナルのウィザードリー慣用句。不評なら目から鱗に変えます　と心配する程、大きな衝撃をシュロモに与えた。

というのも城に飾られる壁画は歴代ソロモンや一族の優秀な魔法使いたちであり、師事し教えを乞うのにこれ以上ない存在であったが常人とは感覚が違いすぎて自身の才覚に基づく教え方しかできないので、感覚よりも緻密な理論を重視するシュロモとは相性が悪かったのだ。

フリットウィック教授の授業は、実践的でウィットに富んでいて理論も重視するので非常に分かり易かった。シュロモは心の中で、フリットウィック教授を〝師〟と尊敬していた。

なんやかんやあって迎えた金曜日。
襲い来るピーブスを血みどろ男爵砲ポルターガイストのピーブスを迎撃するのにこれ以上ない最上級攻撃魔法。ピーブスと偉大なる血みどろ男爵についてはいずれ別の機会に語る。で迎撃したシュロモとドラコは、変身術の授業の始まる5分前には教室に到着することに成功していた。
そして、教壇の上で寛ぐ黒い猫の正体にいち早く気付いたシュロモは、ドラコと共に授業前に予習に励む極めて真面目な生徒を演じていた。クラッブとゴイルは、机に向かう振りをして爆睡しているのだがそこはご愛嬌だ。
ハリー・ポッターとロン・ウィーズリーが遅れて教室にやって来た。
「遅刻したらマクゴナガルがどんな顔をするか、はあ、はあ」
畏れ多くもロンは息を切らしながら、ミネルバ・マクゴナガルを呼び捨てにする。
ドラコはせせら笑い、シュロモも思わずくすっと吹きだした。
教壇から猫が飛び降りると、一人の魔女に変身する。
「変身、お見事でした」
さっきロンが呼び捨てにしたマクゴナガル本人だった。
ロンはどばっと冷や汗をかいた。
「お褒めの言葉をありがとう、ウィーズリー。懐中時計に変身させましょうか？　そう

すれば授業に遅刻しないでしょう」
「道に迷って」ハリーはしおらしく言った。
「では、地図にしますか？　地図無しでも自分の席は分かりますね？」
ハリーとロンは顔を見合わせると席に着いた。
「変身術はホグワーツで学ぶ魔法の中でも、もっとも複雑で危険なものの一つです。いい加減な態度で私（わたくし）の授業に参加する生徒には即出ていってもらいますし、二度と授業に参加させません。最初に警告しておきます。いいですね」
マクゴナガルが、机を一頭の丸々と太った豚に変えた瞬間、生徒は感激してウズウズしだした。ドラコも、必死に取り繕っているが、そわそわしていた。
だが、予想を裏切り待っていたのは散々複雑な板書だった。
ドラコは肩を落としてがっかりした。
シュロモは、ワクワクしながら板書をした。苦手な変身術が理解できる気がしたからだ。
家具を動物に変えることの大変さと、変身術の危険性と基礎の理論を板書で頭に叩き込んだ後、マクゴナガル教授は生徒一人一人にマッチ棒を配った。
「理論を板書出来ましたね。それでは、頭に入れた知識を実際に使ってみなさい。マッチ棒を針（はり）に変えるのです。良いですね？　呪文はアクスヴェルト（なれ）です。それではやっ

てご覧なさい」

「アクスヴェルト！　難しいな。先生が小さな物からと言った理由がこれか！　アクスヴェルト！　ちっとも変身しないぞ」

ドラコがマッチ棒に杖を向けながら悪態を吐いた。

呪文を幾ら唱えてもびくともしないからだ。

何故、ド派手な物から行かないのかドラコは身を以て理解した。無理だ、少なくとも今の自分には。

シュロモはずっと考えていた。

思考していた。一回目の失敗を手掛かりに、何処がいけなかったのかを。無論、杖は使っている。杖なしで変身術が出来るほど変身術は甘くないし得意じゃない。杖なしで変身術を扱える魔法使いなど一人しか思いつかない。

何がいけなかったのか。

シュロモは深く分析すると共に自分なりに理論を噛み砕く。変身術は科学だ。分子配列という物体のミクロな部分から組み替える技術であり、蛹のようだとシュロモは考えた。そして――。

「アクスヴェルト」

シュロモのマッチ棒は、純銀製の不死鳥が彫られた鋭利な針に変化した。
「凄いじゃないか、シュロモ！」
とドラコは食いついた。そして、恥ずかしそうに。
「僕に教えてくれ」
「良いぞ、ドラコ。親友同士助け合いだ」
シュロモはドラコに教えることを通して復習をした。

「みなさん、見てください！　ミス・グレンジャーとミスタ・メルフォティートとミスタ・マルフォイの3人がマッチ棒から針に変身させることに成功しました」
マクゴナガルは杖を振って3本の針を大きくすると、生徒の皆が見えるように空中に浮かべた。
純銀製の獅子の彫られた針、純銀製の不死鳥が彫られた針、純銀製の蛇が彫られた針を展示すると、マクゴナガルは滅多に見せない笑みを浮かべながら3人の針が如何に尖っているか、純銀であるか、そして装飾まで施されているかを指摘し褒めた。
「まさか3人も成功すると思いませんでした。お見事です、3人にそれぞれ1点ずつ与えます」
シュロモは、射貫くような視線から逃げるようにこそこそと変身術の教室を後にし

た。

※

昼休み、シュロモは図書室で読書に耽っていた。
シュロモは読書が好きだった。
ドラコは、クラッブとゴイルと一緒に談話室で寛いでいるらしく、シュロモは珍しく一人で趣味の時間に没頭していた。
長身の黒髪、ハンサムが本棚を背に読書する姿はとても絵になるらしく、遠巻きに女子生徒が眺めるだけで、シュロモは快適な読書の時間を過ごしていた。
そんなシュロモに近付く足音があった。
乱暴に踏み締める足音は、その生徒の不満と怒りを表している。どうやら、よっぽどご立腹のようだ。
「あらかじめ言い訳をさせてもらうなら、悪気があって黙ってたんじゃないんだ」
シュロモは本を閉じると、顔を上げた。
「あら？　なら聞かせて頂戴。どうして黙っていたのかを」
栗毛の髪を逆立てる勢いで、静かに噴火しているハーマイオニー・グレンジャーが

立っていた。

怒れる魔女は、寝起きのドラゴンより怖い

「別に隠したくて黙っていたわけじゃない。……賢い君のことだ、ミス・グレンジャー。何処まで調べた？」

シュロモの質問に、ハーマイオニーは答えにくそうな顔をした。

が、ぽつりぽつりと懺悔するように話し始めた。

「……あなたが彼の高名なソロモンの直系の子孫だと言うこと。……ヨーロッパ魔法族とは冊封関係だったこと、とヨーロッパ魔法族が裏切ったこと。……十字軍が何をして、ヨーロッパ魔法界に何を齎したのか……あなたたちがどうなったのか。――10年前に何があったのかも調べたわ。それと、ホグワーツ城との関係もね」

初めてホグワーツの教科書を買った日、ハーマイオニーは夢中になって教科書を読み漁った。『魔法史』を読むうち、つっかかりを覚えたのは確かだ。

見た覚えがある名がちらほら登場しても、偶然の一致だと思っていた。しかし、結果は違くて、組み分けの時シュロモがメルフォティートの一員だと知った。

そして、それから5日。頻繁に図書室に通って、調べた。

調べた結果分かったのが悲惨な歴史だった。

稀代の天才、魔法史レベルの大魔法使いソロモンと、高弟にして子孫らが研鑽し蓄積した叡智を、杖や魔法の物品を献上することでヨーロッパ魔法界は優れた魔法を教わってきた。だが、畏怖が羨望に代わり、それが嫉妬に変わって――十字軍と共にヨーロッパは……。

「俺に恨みはないよ。それにイギリスはあれに関わってない。中世のいざこざなんか俺は気にしたことがない。俺が気にしているのは、もっと最近の出来事だ。俺たちは詳細不明の何者かに裏切られ命を狙われたんだ。俺は辛うじて生き延びたけど、ほぼほぼ絶滅といっていい」

ハーマイオニーと目を合わせることなくシュロモは喋り続ける。

「あの日、ダイアゴン横丁でメルフォティートと名乗るには勇気がいることだった。誰がどこで何を聞いてるか分からない。安全のために国を飛び出して、遠く離れたこの国に来たけど、それでも安全は確実じゃないからね。それが君に名乗らなかった理由だよ、ご納得いただけたかな？　メシハー」

「確かにそう言われれば納得するしかないけど……ん？　でも待って。なら、列車の中で教えてくれなかった理由にはならないわよ。だって、列車には関係者しか乗れないもの」

「強いて理由をあげるなら、列車でタイミングを逃してから、いつ打ち明けようか、今日

は今日こそはと思ううちにずるずると」
スリザリン寮とグリフォンドール寮に分かれて組み分けされたせいで、余計にタイミングが合わないせいで打ち明ける時間が無かった。
ハーマイオニーはずっとシュロモと話したくてしょうがなかったのに、寮が違うせいで話せなくてずっと寂しかったのに、シュロモはスリザリン生と楽しそうにしていた。
「それで私がこうして問い詰めてる今に至るわけね。そうなんだ、ふ～ん。ま、別にいいわ。あなたのご活躍はグリフィンドールにいても良く聞こえて来たから。とても楽しそうなのは伝わって来たわ」
笑顔を浮かべているが、笑顔じゃない。
ハーマイオニーは静かに怒っていた。
気のせいだろうか？
図書室の温度が一気に下がった気がする。
厳格で気難しいと先輩方にご忠告されたマダム・ピンスが、ハーマイオニーを見た瞬間にびくっとして回れ右して戻ったことを図書室にいた生徒は見た。
「すまなかった。怒る君が可愛くてつい意地悪をしてしまった。隠しごとをした手前気恥ずかしくて避けていたけど、もうしないと誓う。ミス・グレンジャー、スリザリンに

組み分けされた俺だけど……仲直りして友達になってくれ」
真剣な表情でハーマイオニーの目をじっと見てシュロモは謝った。
ハーマイオニーも目を丸くすると、嬉しそうに頬を緩ませた。
「私もかつかつしてごめんなさい。……私はもうシュロモとは友達と思ってたけど、いいわ。友達になってあげます」
「ありがとう、ミス・ハーマイオニー」
「ミスもいらないわ」
「OK、ハーマイオニー」
先程の怒りが嘘の様に、ハーマイオニーは目に見えて上機嫌になった。
それが可愛く微笑ましく思えたが、それを表立って指摘する度胸も動機もないシュロモは黙っている。顔におくびも出さず、シュロモは表情を固定していた。
スキップしそうなまでにるんるんなハーマイオニーは何かに気付き真面目な顔になった。
おっと？
「そう言えば何であの時一人で私と会っていたの？　護衛とかいたんじゃないの？」
あ、マズイ。
シュロモは誤魔化すか、正直に話そうか。

隠しても言っても不安しかない。

怒れる魔女は寝起きのドラゴンよりも恐ろしいとは言うが、まさに今の状態がそうであった。

「あー、一人になりたくて捲いたんだ。破滅願望があったからね、あの時は。今はもう大丈夫だ」

シュロモがそう言うと、ハーマイオニーは形の良い眉を釣り上げた。

しかし、シュロモの予想に反して噴火することはなく、ハーマイオニーは深く息を吐き出した。

「あなたが茶目っ気の多い人だと言うのはこの5日間でよ～く分かったから私から何も言いません。たぶん、あなたの護衛役の人がきつく叱ったことでしょうしね」

「ああ、君の言う通りしこたま怒られたよ」

そう肩をおどけて言う姿はスリザリンの秀才とは程遠く。

そして頬を膨らませ不満アピールをする彼女の様子は、獅子寮の孤高の天才のイメージからかけ離れていた。

二人は堪え切れず、静かに噴き出した。

図書室故に、くすくすと静かにシュロモとハーマイオニーは笑いあった。

「さぁ、早くいかないと魔法薬学の授業に遅れてしまう。次もグリフィンドールと合同

だったな？」
「そうね、早くいかなきゃね。魔法薬学はあなたの寮監が教えるのよね？」
シュロモが読んでいた本を放ると、読んでいた本が一人でに浮かび上がり元あった棚に戻っていった。
その摩訶不思議な光景には慣れっこで、最初はわくわくしていたハーマイオニーも既に気にしていない。
二人はこそこそと囁き声で談笑しながら、図書室を出た。
「あぁ、そうだとも。堅物されどその道のプロで、その授業はレベルが高いと評判だ」
「一番興味ある科目だわ。教科書を読んでみたら、とても科学的で凄く興味がそそられるの」
金曜日最後の授業に思い馳せて二人は歩いた。
会いたかった相手に逢えて、二人は弾むような足取りで授業に向かうのである。

魔法薬のマスター

シュロモがハーマイオニーと魔法薬学の教室に入った時、既にドラコはクラッブとゴイルを引率し、シュロモの分の席を確保して座っていた。
ハーマイオニーは、すたすた歩きグリフィンドールの集団の中でたまたま空いていたハリーの隣に座った。
「こんにちわ、ハーマイオニー」
「こんにちわ」
ハーマイオニーは、そう言うと教科書を広げ始めた。
「ありがとうドラコ」
シュロモはドラコに礼を言うと、ドラコの左隣に座った。その直ぐ後ろにはパンジーが座っていて、いつものメンバーが固まっている形だ。
「どういたしましてシュロモ」
ドアを乱暴に開け放つと、コウモリのような黒装束の男が入って来た。
土気色の顔でお世辞にも健康とはいえないが、目がギラギラしている。髪は黒くねっとりとしており、肩まである長髪の前髪を左右に分けていた。

漆黒のローブに黒髪、黒尽くしでまさにコウモリのような出で立ちの男性こそ、スリザリンが寮監のセブルス・スネイプ教授その人である。

「我輩の授業では杖を振ったりなどという馬鹿げたことはやらん。速やかにしまいたまえ。――このクラスでは魔法薬の調合という微妙な科学と緻密で芸術的な技を学ぶ。良いかな？」

そこで言葉を区切ると、スネイプは後ろを振り返った。

隈が少しある目でギラギラと生徒たちを見る。

「諸君はこれでも魔法かと思うかもしれん。フツフツと沸く大釜、ユラユラと立ち上る湯気、人の血管の中をはいめぐる液体の繊細な力、心を惑わせ、感覚を狂わせる魔力……これらを諸君が真に理解できると我輩は期待しない。だが、伝授してやろう。一部の素質ある、選ばれた者に――」

ドラコとシュロモを一瞬だけ見るとスネイプは言葉を続けた。

「名声を瓶の中に詰め、栄光を醸造し、死にさえも蓋をする技を。我輩が今まで教えてきたウスノロ共よりましであるならばの話だが」

ノートをひたすら取るハリーにスネイプは目を付けると、猫撫で声を出した。

「ところで、諸君らの中には少々自信家がいるようだ。有名だからと言って、我輩の授業など聞く必要がないと。……ミスター・ポッター。アスフォルデルの球根の粉末にニガ

ヨモギを加え煎じると何になる？」
「分かりません、先生」
　ハリーの隣でハーマイオニーが手を上げた。
　だが、スネイプはそれを無視するとハリーをせせら笑った。
「有名なだけではどうにもならんらしいな。ならばミスター・ポッター、ベアゾール石を見つけてこいと言われたら何処を探す？」
　ハーマイオニーが限界まで手を伸ばすが、スネイプはまたもやそれを無視する。
　ドラコが笑う中、シュロモはこの問答の意義が分からず、傍観していた。
「分かりません。ハーマイオニーが分かってるようですから、彼女に聞けばどうですか？」
「黙れポッター。慇懃無礼な態度でグリフィンドールから一点減点。……なるほど、我らがスターは教科書を開くことすらしなかったようだ。名声と実力が釣り合っていないと悲惨だな、ポッター」
　スネイプは、ハリーから目を離すと、シュロモをまじまじと見た。
「さて、ミスター・メルフォティート。我らがスリザリンのスターにも同じ質問をしよう。ミスター・メルフォティート、アスフォルデルの球根の粉末にニガヨモギを加え煎じると何になるか分かるかね？」

「……生ける屍の水薬だったと思います」
そこでスネイプは初めて感心したかのような表情を浮かべると、うっすら微笑んだ。
「……ベアゾール石を見つけてこいと言われたら何処を探す？」
「ヤギの胃の中です」
「ほうほう。ならば最後の質問をしよう。ミスター・メルフォティート、モンクスフードとウルフスベーンの違いは何かね？」
「違いはないです。どちらも同じトリカブトですから。それよりもスネイプ先生、何故このような質問を？」
「失礼したなミスター・メルフォティート。君もポッター同様名声に溺れて現を抜かしているのでは、と邪推したのだよ。スリザリンに5点与える。――ところで諸君、何故今のを板書しないのだ？　諸君にとってもこれが簡単な質問であったというのなら話は別だが？」
スネイプの言葉に、一斉に羊皮紙と羽ペンを動かす音が重なった。
スネイプはその音に重ねるように声を張り上げた。
「今の問答で諸君らの大体のレベルを推し量ることができた。二人一組でおできを治す簡単な薬を調合してもらおう。教科書１４３ページに載っている、諸君らの腕でも辛うじて作れるはずだ。ペアを作ってさっさと作るがよい」

ドラコはパンジーと組み、クラッブとゴイルのウスノロコンビはコンビでペアを組んだので、シュロモはセオドール・ノットと組むことになった。シュロモとドラコの持ちつ持たれつ故に目立つコンビの影に隠れているが、中々に優秀な生徒で寡黙であり、女子の間で密かに人気のある男子である。

スネイプが、マントを翻しながら教室を巡回する中、２人は黙々と調合を続け互いにフォローしあいながら一番早く完成に漕ぎつき１人５点ずつ与え、さらに素晴らしい出来であることに１０点ずつ与えた。

２人の他に才能を見せたのは意外なことにドラコであり、素晴らしい手際であることをスネイプが讃え、みなに手本とするように説明していた、ちょうどその時に事件は起きた。

「御覧の通りに、ミスター・マルフォイの茹で具合は最良であることが分かったであろう。諸君には、これを手本に――」

グリフィンドール生の鍋が吹き飛び、一人が大怪我を追った。

素早く爆発物を検分し、その優れた洞察力と論理力で原因を見抜いたスネイプは声を張り上げて怒鳴った。

「大馬鹿者!!　大方、鍋の火が上がらぬうちにヤマアラシの針を入れたな!!」

スネイプは杖を振ると、零れた劇薬を一点に集めて消滅させた。

劇薬をもろに浴びたネビルの顔には見るにも痛々しそうなオデキがぶくぶく広がり涙を流している。

スネイプは忌々し気に舌打ちすると、ネビルを医務室に連れて行くようにグリフィンドール生に告げると、矛先をハリーとロンに向ける。

「何故ヤマアラシの針に気を付けろと注意しなかった？　彼が失敗すれば自分が有名になれるのかと思っていたのか？　傲慢なポッターの態度に、グリフィンドールから１０点減点」

クラッブとゴイルを手伝ったり忙しくも、充実した時間であり、初めての週の最後に相応しい知を学ぶことができた。

非常に優秀な教授なのだが、依怙贔屓が過ぎるとはシュロモは思った。

幕間　キングス・クロス駅に着くまでの大騒動。

「マグルの駅に溶け込ませるなんてよく考えたな?」
「そうでしょそうでしょ」
　シュロモと、シュロモの護衛役である闇祓(オーラー)いのニンファドーラ・トンクスは横に並んで歩いていた。
　ピンクのショートヘアの女性で、スタイルが良く革ジャケットにデニムとスタイリッシュなファッションを決めていた。マグル的に見ても似合っているしカッコいい。
　その横を歩くシュロモも、まだあどけなさが残っているとは言え、ハンサムでフロックコートを着こなすスタイルも相まってとてもカッコ良かった。
　容姿端麗で、ファッションセンスも良い男女が並んで歩く様は、良くも悪くも行き交うマグルからの注目を集めている。
「どうしてこんなことするの?」
「こんなことって?」
　首を傾げるニンファドーラに対して、シュロモは周りを見渡して更に疑問を深めた。
　息を深く吸えば、鼻孔を擽るは緑の香りと川の匂い。

すぐ左側からはリージェンズ運河のせせらぎが、右や前方からは道を往く自動車の喧騒が耳の奥の鼓膜を揺らしている。

「なんでわざわざこんな人目につく場所を白昼堂々歩いて駅に向かうのかを聞いてるんだ」

シュロモとニンファドーラの２人は、徒歩でキングス・クロス駅に向かっていたのである。

「安全な移動手段が徒歩だからだよ。箒に乗って移動しても少ない人数で警護するのは無理だもん。マグルの乗り物を使う案もあったけど仕組みが複雑なようで実は単純だから魔法を掛けやすいって師匠に却下されたし。移動キーを作って移動するわけにもいかないし、かといってキングス・クロス駅の周りでは姿現わしが出来ない。……だから徒歩で向かうことになりました」

「あ、でも安心して。マグルも警護についてるし、あと一人護衛がいるから御身の安全は私が必ずお守りします。……？」

おどけて言うドーラであったが何やら違和感を感じて押し黙る。

シュロモが慌てて周囲を見渡すと、周囲の様子がいつの間にやら一変していた。

あれだけの喧騒がいつの間にやら鳴りを潜めて、人の気配がまるっと無くなっていた。

自動車はおろか人っ子一人綺麗サッパリ消えている。
「ねぇ、ドーラ。この感じってまさか?」
一瞬のうちにロンドンがゴーストタウンと化したことにシュロモはある懸念を抱いている。
「ごめん、ドジッた。チベットの鏡面魔法だ」
ニンファドーラがそう言った瞬間、何処からともなく閃光が飛来してきて、ドーラはそれを杖を振って跳ね返した。
「兎に角逃げましょう?」
「激しく同意」
ドーラはシュロモと一緒に駆け出した。
「ここだッ」
ドーラはそう叫ぶと、何もない虚空に杖を向けた。
ちょうど同時に、バチンと弾ける音がして渦巻く何かが現れた。
それは、完全なヒト型になる前に、杖の前で押し留められた。ドーラはレイピアで突き刺すように杖を突く、すると渦巻く何かは吹き飛ばされた。
「流石は闇祓い!」
「たまたまうまくいっただけッ　全部は無理!」

仮面を被った魔法使いが４人、次から次へと姿現わしして呪文を唱えた。
色とりどりの閃光が杖の先から放たれて、シュロモを狙うがドーラがそれを杖を使って逸らす。逸らされた呪文は、アスファルトや街路樹に跳ね辺り火花をまき散らしたり道路を穿った。
ドーラがお返しにと無言で、杖を振るい赤い閃光を放った。
閃光を防ぎきれず一人が姿勢を崩した。その、瞬間をシュロモは逃さない。
すかさず杖を出すと、振り返ってその魔法使いに呪文を唱えた。
「ペトフィリカス・トタルス」
走りながら放たれた呪文は、見事に魔法使いに命中しその動きが止めて、そのままの姿勢で魔法使いを転倒させた。
「お見事！」
「どうも、それより、姿くらましないの!?」
走りながら、シュロモは質問する。
「誰かを守りながら戦って！　それでッ、一緒に姿くらましできる自信がアタシには、ない、から、ね！」
後ろから飛んでくる呪文をすべて防ぎながら、ドーラは無理と告げた。
むりくりやったらバラけてしまう。

バチン

大きな音がすると、木陰から山羊の仮面を被った魔法使いが飛び出してくる

「アバタ・ケタブラ（息絶えろ）」

飛んでくる緑の閃光を、ドーラはシュロモの襟首を掴んで一緒に仰け反ることで躱してみせた。

杖を消すとシュロモは、右手で空中を押す。魔法使いは見えない力に押されて体制を崩した。

無防備になった魔法使い。シュロモが手招きすると、相手の手から杖が弾かれて地面に転がり――。

ドーラは最後の止めとして、杖をくるくる回した。

杖を失った魔法使いに防ぎようがなく、勢いよく吹っ飛ばされて魔法使いは丁度その後ろで呪文を唱えようとしていた男とぶつかりもろともリージェンズ運河に落ちた。

大人２人が川に落ちた水音が聞こえると、シュロモとドーラは示し合わせたかの如く走りを再開した。

ふと気になり後ろを見たシュロモは一度前を向くと、さっき見た光景が信じ切れずもう一度見た。

しかし、目に映った真実は変わらず。

「ドーラ！　ふ増えてる！」
４人の暗殺者の内３人を倒したから残り１人の筈が、いつ間にか３人に増えていた。
「知ってる！　兎に角前を向いて走って！　背中はツアタシが絶対に、守るから！」
シュロモと、そしてシュロモを守る邪魔なオーラを纏めて潰そうと何十もの呪文が放たれた。
幾重もの呪文の光線を、ドーラはすべて打ち消したりあるいは弾き返した。
呪文だけでなくゴミ箱やベンチ、街灯までもがピンポン玉のように飛来する。ドーラが杖を振ればゴミ箱は川へ吹っ飛び、ドーラがベンチに杖を向ければベンチは燃えて消失し、ドーラが杖を鞭の様に振れば街灯はバウンドしながら暗殺者たちの方へと跳んでいった。
しかし、戦闘は激しさを増すばかりで埒が明かない。
橋に差し掛かった時、ドーラはブチ切れた。
「あぁぁ!!　もう埒が明かない。シュロモ、さきに行って！　ケリを付けるから！」
ちょうど遠くにキングス・クロス駅のレンガ造りの駅校舎が見える。
「分かった！」
そう言って走り去るシュロモを尻目に、ドーラは橋の端に杖を突きたてた。
「コンフリンゴ・マキシマ・ペトロス（橋よ、木っ端みじんに爆発しろ）」

青白い火花の波紋が広がると、橋の真ん中らへんまでが爆発して砕けた破片が宙に舞う。

ドーラは杖を2度振った。1度目で破片一つ一つが鋭く尖ったナイフに変わり、2度目でそのナイフが追って来る暗殺者に向かって飛んで行った。

「うごっ！」

バチン

悲鳴を背に、ドーラは姿くらましした。

そして橋を渡り終えたシュロモの隣に姿現わしをした。

「凄い呪文だね！」

「まだ安心できない！

プロテゴ・アペリス（空間の護り）」

ドーラは後ろを向くと、杖を構えた。

閃光が漏れ出、シャボン玉のように白い波紋が広がる。

「姿現わし対策かッ」

「苦手だから、保たない！　兎に角ッ、走る」

手こずってはいるが、当初の目的であるキングス・クロス駅は目前だ。

魔法で作られた閉ざされた空間からどう抜け出すかが鍵だが、幸いなことに激しい魔

法の応酬で、魔法の空間に徐々に綻びが生じ始めている。
空間が燃えていて、空間の破片が燃える新聞紙の様にちぢれて消えながら空中を待っている。
許容できる魔力を超え、閉ざされた世界が綻んでいる。
――そして。
「ここが世界の果て、ですか。……はぁ…はぁ」
キングス・クロス駅を睨みながら、シュロモは息を切らす。
８００メートル近い距離を休みなしで魔法を使いながら走ったのだ。体の出来上がっていない１０歳には非常に酷な体験だった。
「多分ね――魔法の防御がしてあるから、魔法の空間はここで終わり。一気に壊そう……準備は良い？」
だがドーラは、流石は闇祓い《オーラ―》と言ったところか、殆ど息を切らしていなかった。
魔法力もさることながら体力の鍛え方も違うようだ。
「……はあ…はあ。もちろんだとも」
シュロモは、杖を出すと構えた。
「じゃ、いくよ。３――２――１、はい」

ドーラも構えると、２人は息を合わせて。
「フィニート・インカーターテム!!」
同時に炎のような光線が噴き出し、見えない何かにぶち当たって壮絶に火花を散らす。
空間が激しく燃え上がり、目がくらむような閃光を放つと――周囲にマグルの喧騒が戻った。
風が吹き、緑に色と匂いが戻り、世界に命が吹き込まれている。
窮地は脱したようだ。
闇祓いやマグルの警護役が慌てて駆けてくるのを見て、シュロモは安堵の息を漏らすが。
「マズイ、このままじゃ出発の時刻に遅れちゃう。ダッシュ！」
ドーラのせいで、再び走る為になった。
シュロモがホグワーツ特急に、ギリギリで乗る羽目になった理由を知る者は少ない。
こうして、シュロモはホグワーツに向かうのであった。

ちなみに、ドーラはお詫びの印に元気爆発薬を買い与えたのだが、それのおかげで、ハリー相手に存分にカッコつけられたのは言うまでもない。

友からの忠告と、シュロモの決意

「ねぇシュロモ。ここの呪文なんだけど――」

「すまないハーマイオニー。先日の変身中の課題なんだが、君に見てもらいたい箇所がある」

シュロモとハーマイオニーは和解した。

シュロモは、ハーマイオニーに抱いていた後ろめたい感情をすべて清算し、ハーマイオニーはシュロモに抱いていた不満を解消させ、２人は晴れて友達として交流を重ねていた。

まだ４日しか経過していないが、図書室での逢引きは実用的であり、またシュロモにとってもハーマイオニーにとっても刺激的で魅力的な時間となった。

宿題を教え合ったり、他愛のない雑談をしたり……非常に楽しくて夢のような時間である。

だが、それは目立っていた。

魔法界で最も高貴な家系の『王子』と、学年一の秀才と陰で評判の『穢れた血』の逢引きは、本人たちにとってひっそりとしているつもりでも、否応なしに注目を引いてい

た。

学校の中で、密かな噂話として広まり、そしてそれは排他的で同胞愛の強い蛇の耳にも届くのであった。

「悪いことは言わない。シュロモ、穢れた血との交流は今すぐに絶った方が良い。君の為にならない」

シュロモが談話室で読書をしていると、ドラコが開口一番にそう言って近付いて来た。

ドラコが、シュロモの読書の邪魔を明確にするのは非常に珍しい光景だ。互いに互いを敬い尊敬しあってるが故に、ドラコが趣味を害することはこれまでなかった。その逆も然りである。

だが、ドラコは珍しいことにシュロモの趣味を邪魔し、義憤に燃えた瞳でシュロモを見ていた。

ドラコの差別的蔑称と、それが指し示す相手が容易に想像でき、シュロモは読書を止めてドラコの顔を見た。

「どうしたんだドラコ。急にそんなことを言い出すなんて、らしくないぞ？　私の貴重な学友を友に貶して欲しくはないのだが」

ハーマイオニーを貶され、シュロモは不快な気持ちになったが、それを隠してドラコに務めて穏やかに話し返した。
だが、ドラコの表情は晴れるどころかますます曇り、真っ赤になった。
「僕は君を思って言ってるんだ！」
怒鳴らないように自制するが、それでも決して穏やかではない声音でドラコは言った。その言葉に嘘はない。
本気でシュロモを案じてることが伝わる故に、シュロモは黙って話を聞くことにした。
「図書室で君が穢れた血と仲良くしているのを見たと言ってる奴がいる。勘違いされるぞ、……君が、その……あー」
「ミス・ハーマイオニーに恋してる？」
言い辛そうにしていたドラコの言葉を繋ぐと、ドラコは再び口を開いた。
「……そうだ。これ以上悪い噂が広まる前に交流を絶て。そうすれば僕の力で揉み消せる。今ならまだ取り返しがつく」
ドラコの目を見て、シュロモは小さく噴き出した。
まったくどうしてドラコは良い奴なんだろう。
「なら、交流を絶つ必要はないな。噂は真実だ」

「な!?」

ドラコは絶句し、聞き耳を立てていたスリザリンも驚く顔をした。

衆目で断言してみせるとは、――それが何を意味するか分からないほどシュロモは愚かではない筈だ。

「私はホグワーツに安寧と保護を求め入学した。そして、私には一族を再興させるという夢もある。だから、私は卒業するまでの間に一族に迎える妃を探さないといけないんだ」

「そ、それなら僕が紹介してあげようじゃないか。父上に頼んで縁談を組んでもらうことだって出来るぞ！　それで解決だ。穢れた血で身を穢す必要はない！」

「血の貴賤を問うならば、我が一族にとって王の血が流れぬ者は皆等しく下民だよ？」

そう告げるシュロモの目は冷ややかで、初めて見せるシュロモの表情にドラコはたじろいた。

下民と穏やかな表現を選んだが、メルフォティートが掲げる主義からしたら、王の血を引かない者は純血だろうとマグル生まれだろうとマグルだろうと、そして魔法動物であろうと等しく下等生物なのだから。

「残念ながら身内に迎え入れられるほど私たちと君たちの歴史は平和じゃなかった筈だ……と言うと意地が悪過ぎるかな。私は気にしていないからな」

平和じゃなかった……、そうシュロモの口から語られた瞬間――談話室は一気に静まり返った。

１０９９年、魔法史に記された最初の世界大戦が起きたが、グレート・ブリテンの魔法族は何もしていない。

グレート・ブリテンの魔法族は静観を決め込んでいた。

グレート・ブリテンは多大な恩（ホグワーツ城の魔法等）を受けておきながら、何もしなかった。

シュロモが、ただ1人だけ生き残ったメルフォティートが言い放った言葉は、ドラコを黙らせて、聞き耳を立てていたスリザリン生を凍てつかせるのに十分な重みを秘めている。

一瞬で静まり返った談話室を見渡すと、シュロモは苦笑して気にしていないと言葉を付け足した。

「君たちが聖２８一族だからといって責任を感じる必要はないよ。魂や誇りは守っても、叡智は独占すべきでなかった。王の血を引かねばヒトに非ず、そんなふざけた思想を妄信していたんだよ？　私たち（メルフォティート）は今、自分たち（メルフォティート）の手によって絶滅の危機にある。十字軍がなくても、『王国』はどの道滅んでいたさ」

あっけからんとシュロモは世間話をするかのように軽い調子で言った。

永い魔法史上で唯一成立した魔法使いのための中央集権国家『王国』の崩壊を、シュ

ロモは必然であったと断言する。

それに対する意見など言える筈がなく。

「――もしあの『悪夢』がなく、純粋な見聞を広める目的での留学なら君たちの中から妃を選んでいたと思う。みんな、優しい人ばかりだ。だけど、今メルフォティートに余裕はない。私以外全滅した今、他国の純血を一族に迎える訳にはいかないんだ。そのことは君たちにも通ずるだろう？」

「……言わんとすることは分かるけど、ならば自国の純血がいるじゃないか。なんでわざわざグリフィンドールの穢れた血……グレンジャーを選ぶ？」

穢れた血と言った瞬間、流石に我慢が限界なシュロモが目を細めたので、ドラコは渋々と言った様子ではあるがグレンジャーと呼び変えた。

外国が無理ならば、自分の国の純血を娶れば良いのでは？　ドラコの新たな提案も、シュロモは一刀両断に切り捨てた。

「自国の血統なんか益々論外だ。誰が裏切り者か分からないし、危機に乗じてわが身大事に逃げ出す輩の血など迎えてたまるものか。図々しい、向こうから乞うてきてもこっちから願い下げだ」

エルサレム魔法界を担う純血たち……賢人階級（メルバーダ）は１０年前にこぞって逃げ出した恥知らずの集団だとシュロモは思っている。

恩知らずで、愛国心の欠片のない薄情者の血を入れるなどシュロモには耐えられない。

シュロモは、確固たる決意を滲ませて、ドラコに断言した。

「兎に角、とれる選択肢は一つだ――他国のそれも第三国のマグル生まれを娶ること。それも先祖に恥じぬ思慮深き才女を一族に迎え入れる。当て嵌まる魔女は……ハーマイオニー・ジーン・グレンジャー只1人。『王』を仰ぐ者を、『王家』は種族問わず歓迎してきた。故に、マグル生まれだろうと大した問題にならない――納得してもらえたかな？　私の掛け替えのない友、ドラコ」

ドラコは、自分の目を真っ直ぐ見据えるシュロモの目をじっと見た。

ドラコを視るシュロモの目には迷いはなく、覆しようのない覚悟の炎が揺らめいている。

「つまり君は聞き入れるつもりがないと言うことだな？　僕の忠告を無視して、友情が解消されるとしても……君はグレンジャーを取ると？　スリザリンを敵に回す覚悟があるということか？」

敢えて脅すような物言いでドラコは言うが、シュロモの表情に変化が見られない。

覚悟に微塵も影響を与えられなかったのだ。

「言葉を選ばずに言うならその通りだ。私の心は、彼女に初めてあったその日に決まっ

ている。……視野狭窄に陥ってるのかもしれない。だけど、私は自分の気持ちを信じる。例え、――ドラコ君との友情が解消されるとしても……スリザリンでの居場所を失うとしても、私は自分が見初めた宝を諦めたくない」

無視できない沈黙が走る。

ドラコは何度か口を開けては閉じるを繰り返し、言いたいことを整理する。

「君と間近に過ごして、君はレイブンクローの方があってるんじゃないかと思ってた」

魔法に対する貪欲さ。

名誉より知識を欲するその姿勢は、蛇的ではなく鷲的行動である。

シュロモと行動するうちに、ドラコのそうした思いは強くなっていった。

だが、それはドラコの思い違いだったのだ。

「だけど思い違いだったね。シュロモ、君は間違いなくスリザリンだ。臆面もなくこの場で断言した狡猾さ、……きちんと筋道が立っている理屈を僕たちは無碍にできない。それに君のグレンジャーに対する執着心はまさしく蛇（スリザリン）的だね。――わかったよ」

毒蛇のように狡猾的で、大蛇のような執着心を持ち、蛇のように理知的である、その精神は間違いなくスリザリンだ。

ドラコは心底悔しそうに言った。

「君の勝ちだ、シュロモ。正直言って納得しかねるが理解はしたし、承服はした。君の決

意が固いことは分かったし覆らないこともね。――だからこの件について諦めるよ
シュロモ。寮に迷惑をかけない間は、僕は君の関係に金輪際口出ししない。君がどこの
誰と付き合おうが、聖28一族（ヨーロッパ魔法族）と関係しようがないことだ。僕との友情よりも、君が迷
わずにグレンジャーを取ったことが僕には悔しくてたまらない」
「ありがとうドラコ。君の広い心と、蛇の寛大な精神に感謝する」
「ということで手打ちにしましょう、監督生。この分からず屋は友達の言葉も聞き入れ
やしない頑固者です。それに他所のお家事情に首を突っ込むべきじゃない」
　その言葉に、壁に背を預けながら本を読みふけっていたコロントは、その手に持つ本
をばたんと閉じると顔を上げてシュロモとドラコの2人の顔を見つめた。
　そして億劫そうに口を開く。
「私は由緒ある純血じゃない、単なる杖振（ワンドスウィンガー）りに過ぎない。監督生と言っても殆どお飾
りの様な者、私の言葉に権力はない。君の言葉こそが、この寮の意思だ。と言っても君
は納得しないのだろうな。はぁ、……スリザリンは個人の交流関係にまで関知しない。
ホグワーツの模範と、スリザリンの良識に反しない範囲なら関わるな。これでいいな、
諸君？」
　そう言うと、コロントはスリザリンの談話室にいる生徒を、一人一人見つめた。
　隈塗れで血走った目でぎょろぎょろ見つめられ、生徒たちはつい飛び上がってしま

う。

「間違ってもスリザリンに招いたり、グリフィンドールの席に行くようなはしたない真似だけはしてくれるなよ？　」

わざわざシュロモの耳元に口を近付け、低い囁き声でそう言うとコロントはやることは終えたとばかりに寝室に引っ込んだ。

「監督生としての仕事は果たした。友情の確認は、当人同士だけで済ましたまえ」

捨て台詞を残して。

「君の面子を潰して気遣いを不意にしたのだが、私とドラコの関係は続くと期待してもいいかい？」

シュロモが、ドラコの顔色を伺うように言うと、ドラコはしょうがないなという顔をした。

内心少しどころかかなり嬉しいのに、すました表情をしている。

シュロモの友人は今のところ、全員素直じゃないようだ。

「あぁ、いいとも。正直、僕との友情よりも女を取ったことにわだかまりを覚えないと言えば嘘になるけど。僕と君は友達だとも。グレンジャーのことはまったく認めないけどな!!!　突っかかってこない限り僕から関わることはしない。これが僕にできる最大限の譲歩だ」

「それだけでも嬉しいよ。正直言うとこれが初恋で、生まれて初めて人を好きになったんだ」
「は!?　嫁云々を初恋なのに言ったのかい!?　それであれだけの啖呵と歯の浮くようなセリフを……」
「何かおかしいことでも?」
「……いや何でもない。それより、課題についての話をしよう」
頭が痛くなったドラコは、話しを変えて課題についての話題を提示した。

そんな、ドラコの様子を見てスリザリンは渋々だがシュロモの奇行に目を瞑ることに従った。
相手が半純血ならば、寮をあげて叩き潰す所存ではあるが、間違いなく聖２８一族よりも血が確かな高貴な血族相手ならばそういうものだと受け入れるしかないのだから。

初めての箒訓練

「ついに来たぞ、シュロモ。飛行訓練の時間だ」
「ああ、ついに来てしまったなドラコ。不安で不安で仕方ないよ」
木曜日。
談話室の掲示板に
飛行訓練は木曜日開始される。グリフィンドールとの合同授業だ。間違っても遅刻はせぬように
とありがたくも寮監が殴り書いたと思われる走り書きが掲示されていた。
飛行訓練――箒に乗る訓練が始まるとあってドラコはとても興奮していたのだが、シュロモの表情は昏い。
箒の訓練を終えた暁に個人用の箒の持ち込みが許可されるというのに、何故そんな嫌そうな顔をするんだとシュロモに疑問を抱いたが直ぐに霧散した。
「そうか、箒がないんだった、か？　杖と同じで、箒が一般的じゃないんだ」
「あら？　なら、エルサレムの魔法使いたちは何に乗って移動するの？」
パンジーも興味津々と言った様子で、話しに入ってくる。ワクワク顔だ。

「魔法の絨毯か動物に乗っての移動がほとんどだよ。自力で飛ぶ達人が1人いたな。――私も杖があれば飛べなくはないが、才能がないらしく箒の様には飛べない」
「自力で飛べる方が僕からしたら凄いと思うけどな」
「ね、飛んで見せてよ」
「色んな魔法が干渉してくから城の中では無理。校庭とか訓練場とかならできると思うから、機会があれば見せてあげよう。と、言っても本当にうまくないよ？　箒で飛ぶのより劣る」
「道具無しで飛べる時点で、凄いじゃないか」
シュロモとパンジー、そしてドラコはクラッブとゴイルを引き連れて談話室を後にすると、大広間へと向かった。朝食を食べるためだ。
楽しみ、不安、羨望、期待、焦燥。
4人の内で渦巻く感情は違うけれども、飛行訓練を待ちわびていることは共通していた。
※
「ねぇ、大丈夫なのシュロモ？　緊張し過ぎよ？　たかが訓練なんだからリラックス」
箒の乗るという行為は、予想よりもシュロモに緊張を強いるもので、シュロモは緊張

のあまり朝食を食べれないでいた。食事が喉を通らないのだ。
「そうだぞ、シュロモ。パーキンソンの言う通りだ。たかだか訓練、クィディッチの試合じゃあるまいし、何も緊張する必要はないぞ。――ほれ、アイツらを見ろ」
と言ってドラコはロンやシェーマスといった飛行訓練を心待ちにしているグリフィンドール生を指差した。
「あんな奴らだって緊張してないんだ。優秀である僕や君が、たかが訓練如きでそう緊張しなくていい。箒が下手くそだったしても、君は優秀な魔法使いだろ？　お、郵便の時間だ。今日は何が届くかな」
ドラコは分かり易いくらいに大きな声で話を逸らそうとした。
ふくろう便の時間であり、たくさんのふくろうたちが大広間に飛んで来た。
マルフォイ家のふくろうはいつも通り、大量のお菓子の包みを運んで来た。
ドラコは包みを開けると、いくつかの菓子をシュロモと分け合った。
「カエルチョコレートがダースも入ってる、シュロモに半分あげるよ。――おっと、最高級七食アメだ。世界各国の高級料理の風味をランダムで味わえるんだ。とてもうまいぞ。これも君にやろう」
ドラコの気遣いを、シュロモはありがたく頂戴する。
と、そこで突然空中で炎が燃え盛り、中から不死鳥のフェニアが飛び出してきた。

最初の数日は、ざわついていたが毎日のように突然現れて郵便物を運ぶ姿を見ると、人間は慣れるものでちょっと見惚れる者が出るだけで、もはや騒ぎにはならなかった。

フェニアはくちばしに手紙を咥えていた。

シュロモは手紙を受け取ると封を切って、中を読んだ。

そして中身を全部見ると、怒りのままにびりびりに破り捨てた。

「誰からの手紙だい？　破り捨てるなんて」

「傍付きの闇祓（オーラー）いからだ。今日飛行訓練があるのを知ってたらしく、とても無礼なことが書いてあった。またくもって腹立たしい、くそ」

先程の緊張が嘘のようにシュロモはガツガツと朝食を食べた。

親愛なるシュロモ様へ

ホーキで飛べなくたっていいじゃん！

気にすることはないよ、箒に乗れなくたって恥ずかしいことじゃないもん

トンクス

追伸！　アタシは箒乗り上手いけどね♪

あの闇祓（オーラー）いの小馬鹿にした顔がありありと目に浮かぶ。

「フェニア、今度アイツから何か受け取ったらそのくちばしで突け」
フェニアは、呆れたような顔をして、自分の羽に顔を埋めると自分で毛繕いをした。

※

スリザリン生は、午後3時半の10分前には、全員集合し整然と並んでいた。
よく晴れていて、少し強めの風が青々とした芝生をゆらゆらと揺らしていた。絶好の飛行日和である。
そこへグリフィンドール生がやって来て、そして時間きっかりにマダム・フーチがやってきた。
灰色の髪を短く切り揃えた妙齢の魔女で、鋭く黄色い鷹の眼をしている。
「こんにちわ、皆さん。何をぼさっとしてるんですか！」
マダム・フーチは開口一番ガミガミ言った。
「いよいよ飛行訓練です。さっさと箒の左側に立ちなさい」
マクゴナガル教授やスネイプ教授とは違った方向性の厳格な先生のようだ。
「左手を箒の上に出しなさい」
みんなびしっと手を箒の上に出した。

「『上がれ』と言いなさい」
「「上がれ!!!」」
何と奇蹟的なことにグリフィンドールとスリザリン、相容れない二つの寮の声が揃ったではないか。
だが、上がれと言って直ぐに箒が上がったのは数名だけだ。
ドラコ・マルフォイ。ハリー・ポッターの他に2、3人。
シュロモの箒はちょっと動くだけでちっとも浮き上がらない。ちらりとハーマイオニーを見れば、ハーマイオニーの箒もどっしりと地についていて動く気配すら見せない。
ハーマイオニーと目が合って、互いに苦笑した。
「毅然とした態度で言うんだ。杖までじゃないけど、箒も乗り手が肝心なんだ」
すぐさま箒が上がったドラコは、熱心にシュロモに箒を教えた。
はじめてシュロモに物を教えれることに、密かに舞い上がっているのか熱心に指導している。
「乗り手が不安がってるようじゃ箒は応えない。ましてや自信がなければね。自分を信じて『上がれ』って言うんだ」
「おーけい、ドラコ。やってみるよ」

そこで、シュロモは家臣たちに命じる時のことを思い浮かべた。
毅然と命令する自分。
己が主人で、箒が家臣だと思え。
「上がれ」
シュロモが毅然とした態度で言うと、箒はすんなりと上がった。
遠くでチラ見していたハーマイオニーはあんぐりと口を開けて、パンジーは嬉しそうに笑みを浮かべた。ちなみに、パンジーは箒が古いのか一発成功とはいかなかったが二回目で成功させていた。
「な？　簡単だろ」
「ありがとう、ドラコ。感謝するよ」
２人の友情はさらに深まった。
「ミスター・マルフォイ。素晴らしい教え方でした。スリザリンに5点」
「では、箒の柄をしっかりと握って箒に跨りなさい」
マダム・フーチが次の指示を出した。
生徒は皆箒に跨るとしっかりと柄を握った。
マダム・フーチは正しく握れているか、チェックするために巡回を始めた。
「ミスター・メルフォティート。握りが甘いです、それでは飛んだ時に箒が思ったように

動いてくれません。もっとしっかり握る様に」
　シュロモの場合は握りが甘いと指摘して――
「ミスター・マルフォイ。箒の握り方におかしな癖がついています。これでは高速飛行時に、予期せぬ曲がり方をして事故につながる恐れがあります。今すぐ正しい持ち方に直しなさい」
　ドラコの場合には、家で我流で乗ったが故に自己流が過ぎると、矯正された。
　物言いは鋭くずばっとしているが、指摘は的確であり彼女が箒乗りとして如何に熟達したプロであることがよくわかった。
「アイツら僕を笑ってる、許さないぞ！」
「まぁ落ち着けよドラコ。君の寛容な心が泣くぞ」

「さあ、いよいよ飛行します！　私が笛を吹いたら地面を強く蹴ってください。ぐらつかないように両手でしっかりと箒を押さえて2メートルくらいの高さを浮上したら、少し前かがみになってまた地面に降りるのです！　いいですね！　笛を吹いたらですよ。それでは行きます――1――2の」
　そしてマダム・フーチは笛を吹いたのだが、緊張やら何やらでネビルは地面を思い切り蹴ってしまい、勢いよく飛び立ってしまった。

「ミスター・ロングボトム！」
マダム・フーチは鋭く呼び付けた。
「何をしてるんですか！　ミスター・ロングボトム！　今すぐに降りてらっしゃい」
だが、ネビルは降りる気配を見せず、むしろ箒が暴れ出してネビルは振り回され始めた。
「落ち着きなさいネビル・ロングボトム！　ミスター・ロングボトム！」

上空をしっちゃかめっちゃかに飛び回る箒。
ネビルは落ちない様に必死に掴まるのだったが――。
「「きゃあああああああああ!!!!」」
箒から落ちて、女子生徒の悲鳴が響き渡った。
だが運の良いことにネビルは、城壁の篝火にローブが引っ掛かったので、落ちずに済んでいる。
だが、ローブが徐々に破けて。
ネビルが落ちるッ！
誰もが思った瞬間。
シュロモは箒を置いて飛び出した。そして素早く、杖を出すと握り締める。

「おい、シュロモ！」
ドラコが呼び止めるが返事せず、シュロモは地面を強く踏んだ。
すると、シュロモの体は浮かび上がり、空中を足場があるように蹴る。
文字通り空中を蹴って浮遊すると、シュロモはネビルを抱き留めて地上に降りた。バランスを崩し、転んだが怪我はない。
マダム・フーチはいち早く駆け付けると、ネビルとシュロモの怪我の具合を見た、二人とも無傷でネビルだけが気絶していた。
空を落ちるショックで、気絶したのだろう。
「念の為、ネビル・ロングボトムを医務室に連れて行きます。ミスター・メルフォティート。見事な判断と飛行術でした。スリザリンに5点あげます！　私が医務室にいっている間、箒に乗ってはいけません。箒一本でも飛ばしたらクィディッチのクの字を見る前にホグワーツを出て行ってもらいますからね！」
と、マダム・フーチがネビルを連れて去ると。
どっとスリザリン生が集まりシュロモの周りで興奮して囃し立てた。
グリフィンドールもさっきの光景を、指差してひそひそと喋っている。
「凄いじゃない！　今のが空を飛ぶ魔法なの？」
「なあ僕にも教えてくれよ！」

パンジーとドラコが、いの一番に興奮して捲し立てる。
「残念だがドラコ、君は幼少期に浮かんだことはあるかい？」
「いやないが……まさか？」
「父上が単独飛行の研究をしていてね。単独飛行術は先天的な素質で幼少期には発現するらしい。それを訓練することで、何とか飛べるようになる。父上曰く七変化と一緒で、後天的に芽生えた試しはないそうだ」
「くそっ　それじゃあ無理じゃないか」
単独飛行の夢がついえたドラコは、やるせない気持ちのまま歩き出した。
「空を箒無しで飛ぶなんてすごいことよ。誰にでもできることじゃない」
「今日はたまたま上手くいっただけだよ。今までで飛ぼうと思って飛べた試しがない。全部の神経を飛ぶことに使うから何もできないし、箒か絨毯に乗って飛ぶ方が私には合ってる。それに、消耗も激しいんだ」
「おい見ろよ！」
と、ふてくされて歩いていたドラコが地面に転がる何かを見つけて拾い上げた。
「ロングボトムのばあさんが送ってきた『バカ玉』だ！」
ドラコは、『思い出し玉』を拾うと、ジャグリングのように遊び始めた。
「マルフォイ、それを僕に渡してくれ」

ハリーは静かに言った。
スリザリンも、グリフィンドールも話を止めてドラコとハリーの口論に注目した。
「なんだいハリー・ポッター。生き残った男の子！　お怒りかい？　ならロングボトムが取れるような場所に置いていくよ。そうだな、……木の上なんてどうだい？」
ドラコの言葉にスリザリンはどっと笑ったが、シュロモは呆れた顔をした。また、始まったと。
だがしかし、あまり人と話してこなかったシュロモはドラコを止めることができない。口論した経験がないので、止められないし、実のところ喧嘩に憧れているのだ。
「返せったら！」
「そうかい！　なら取りに来いよ！」
そう言うとドラコは箒に跨って空に飛び立った。
箒乗りが得意というのは過言ではなく、手慣れた手付きで箒の柄をしっかりと握ると、地面を蹴ってあっという間に木の高さまで飛びあがった。
「勇敢なポッター君はここまで来れるかな！」
ドラコはせせら笑った。
マグルに囲まれて育ったハリーに、初めてで箒に上手く乗れるわけがないと思っていたからだ。

だが、それはドラコの勘違いで。
「ダメよ、ハリー！　止めて、フーチ先生が飛んではいけないっておっしゃっていたでしょう！」
ハーマイオニーが叫んだが、ハリーは無視した。
ドクン、ドクンと高鳴る心臓と、湧き上がる衝動に身を任せてハリーは箒に跨って地面を強く蹴った。鮮やかに飛びあがると下で歓声が湧き上がった。
ハリーとドラコが上で言いあってる。
それを下から見上げながら、シュロモはハーマイオニーに話し掛けた。
「やぁ、ハーマイオニー。ご機嫌いかがかな？」
「彼ってあなたのお友達でしょう？　何とかできないの？　何とかしてくれたら嬉しいな」
「彼にショッキングな事実を教えちゃったからね。完全に八つ当たりだよ、俺にはどうしようもない。それより彼の父上は相当のシーカーだったようだがやはり箒の才能は遺伝するんだな」
ドラコが曲芸飛行を披露し、それに追従して飛ぶハリーの、初めて箒に乗るとは思えない鮮やかな箒捌きを見ながらシュロモはしみじみと言った。
飛行関連の才能は遺伝すると父の研究にあったがアレを見ると概ねあっているよう

だ。
　ジェームズ・ポッターの名シーカーぶりは、ホグワーツに飾ってあるトロフィを見ればよくわかる。
　ハーマイオニーも、『生き残った男の子』関連でハリーを調べた時、ジェームズの記録を調べたので箒の才能があることは知っていて、あまり驚いていない。
　それよりも、これ以上減点されたらどうしてくれようかという怒りが彼女の中で渦巻いている。
「……前に図書室で言っていたあなたのお父様の研究のことね。まったく、フーチ先生は飛んじゃダメっておっしゃったのにハリーってば一体何点減点されれば気が済むのかしら！　彼ってお馬鹿ね！」
「……あー、おそらくだが、ハリーが減点されることはないと思うよ」
　ドラコがぶん投げた『思い出し玉』が地面目掛けて落下するのを、ハリーが迷わず追いかけて急下降する様子を見ながらシュロモは言葉を続けた。
「箒も絨毯も才能がない身からしたら妬ましい才能だな――っと、とにかく彼が君たちに迷惑をかけることはないと思う」
「あら、どうしてそう言い切れるの？」
「それは君たちの寮監が――」

ここで歓声が沸き上がって、シュロモの言葉が掻き消された。
そして城の中から厳格で身内贔屓しないことで有名なグリフィンドール寮監ミネルバ・マクゴナガルが出てきたので二人は話しを中断した。
グリフィンドール生の女子とロンがマクゴナガル教授に弁明するが、教授は聞き入れることなく城に大股で歩いて、その後ろをハリーが付いていく。
「ねえシュロモ。あれを見て、なんでハリーが減点されないと言い切れるの？」
「――すまん、ドラコがもの凄く凹んでいるから、またの機会に教えよう。忠告だが、あまりとやかくこの件を言わない方がいい。いいね？　俺の予想があっていればだが、ハリーとロンにとやかく言う必要はない！」
そう言うとシュロモは、慌ててドラコの方に駆けていった。
「なぁドラコ。気にするなって。中々に見事な箒捌きだったじゃないか」
シュロモはドラコの肩を叩いた。
「……ポッターに負けた！　アイツ、マグルに囲まれてた癖に、ずっと箒に乗ってた僕よりも上手かった！」
それが悔しくてたまらないのだとドラコは荒ぶっている。
「仕方ないさ。あいつの父親は優れたシーカーだったんだ。気にすることはない、君の方が勉学は優れている。箒が下手くそでもいい、君はそう言ったろ？」

「だが……！　くそっ」
「落ち着けよ、ドラコ・マルフォイ。ドラコの飛びっぷりは凄かった、光る何かを感じたぞ。な、ミス・パーキンソン」
「ええ、そうよ！　きっと来年のシーカーはドラコに違いないわ！」
パンジーとシュロモの本心からの言葉に、ドラコは少し気を取り直した。
「――本当にそう思うかい？」
ドラコは問い掛けるように二人を見た。
「ああ。もちろんだとも」
「ええ、当然だわ」
ドラコは、気を取り直すとスリザリンの談話室に戻った。
その日食べた夕食は、ちょっぴりしょっぱいと感じたドラコであった。

Q　ドラコが荒れた理由。
A　単独飛行が絶望的と知りショックを受けて、それで八つ当たりしたらハリーが箒上手くてアドバンテージが崩された二重ショックのダブルパンチがクリーンヒットしたから。
今回は不憫なドラコをお送りしました

麗しの姫の涙

飛行訓練のあった日の夕方。

ドラコは立ち直って、ハリーが罰則をくらうぞと談話室中に吹聴して回ることで元気を取り戻していた。

最初はポッターが退学すると信じていたのだが、シュロモがマクゴナガル教授の唯一の欠点を指摘すると、非常に嫌な想定だが可能性が高いと考えを改めたのだ。

敬愛すべき我らが寮監に匹敵する程、厳格なあの教授が規則を無視して私情を優先する姿など想像が付かなかったが、教授の持つ欠点は有名だとドラコの父が話していたことがあったとドラコは思い出したのだ。

だが、ポッター退学説を改めた真の理由は別にある。ポッター退学説を声高らかに唱えていたのだが、「ハリーが退学になったら、先に飛んでたドラコはどうなるんだろ」とシュロモが呟いたのを耳にしドラコは瞬時に考えを一転させた。

ハリーが退学になることはドラコにとって喜ばしいプレゼントに違いない。だが、勝手に箒に乗ったことを理由に退学になるのならドラコも退学される可能性が出てくる。

だからドラコは考えを改めて、ハリーが罰則を喰らうことに懸けたのだ。

※

シュロモが指摘した嫌な妄想は見事的中し、ハリーが史上最年少シーカーに抜擢されたとドラコやシュロモが知ったのは、夕食を食べるために大広間に着いた時だった。

クィディッチ馬鹿とは聞いていたが、厳格であることを期待していたドラコは、自身が抱いていたマクゴナガル像が間違いであると否応なしに分からせられた。

「ポッター、これが君の最後の晩餐かい？」

ドラコは、クラッブとゴイルを引き連れてハリーのいるグリフィンドール席に向かった。

シュロモは我関与せずと優雅に夕食を食べていた。

未だ慣れぬ異邦の料理に舌鼓をうつシュロモの邪魔をするなんて酷な真似をドラコにはできなかったのだ。

そしてドラコはハリーに決闘の約束を取り付けた。

その日の夜、きっとポッターたちはトロフィ室でぼうっと突っ立って罰則を喰らったに違いないとドラコは上機嫌に笑っていた。憎きハリーを嵌めて愉悦に浸っているのだ。

その次の日からだ。
ハーマイオニーの様子が少し変わったのは。

※

「……どうしたんだ、ハーマイオニー。ぼうっとして」
「……っ、いえ何でもないわ」
「けれど……」
「良いから！　ホントに何でもないの!!」
「いや、しかしだな……」
「それより、あなた変身術の復習をしたほうが良いわ。というかしましょう！　他の1年生と比べるとましだけど、あくまで他と比べるとよ？　呪文学や魔法薬学はお得意のようだけどそれに並べるとあまりにお粗末じゃない」
いつものように図書室で2人で、自習をしていると、ハーマイオニーが呆けていることに気付き、シュロモは何かあったのかと問い掛けた。
ぼうっとするハーマイオニーの横顔が儚げで、そして悲しげな雰囲気を帯びていたのだ。

しかし、そんなシュロモの心配をハーマイオニーは切り捨てた。
「……確かに変身術は苦手だけれども。……、君が言うなら俺は追及しないよ。ハーマイオニー、さぁ俺に変身術を教えてくれたまえ」
「ええ、いいでしょう。教えてさしあげます」
違和感を覚えたのだが、他ならぬハーマイオニーの言葉だからシュロモは引き下がった。
ハーマイオニーに嫌われたくない故に、ハーマイオニーの嫌がることはしない。――シュロモは、まだまだ若い思春期ボーイだった。

※

クラップとゴイルのトロール並みの言動に、ドラコが不憫に思ったシュロモが、ドラコへ恩返しの一環としてとしてクラップ&ゴイルトロールブラザーズを「人間なみの知能にしようプロジェクト」を計画し、いざ実行すると予想よりも時間を取ってしまい図書室に行く時間が中々取れなくなってしまった。
それでも、大広間にいるときはアイコンタクトしたりと交流を、欠かすことはなかった。
「最近、少しようすがおかしいが、本当になにもないのか?」

「……っ。あなた、少しお節介が過ぎるわ。何でもないって言ってるでしょ」
「けれど、最近ずっと上の空だ」
「大丈夫だから、大丈夫よ！　平気、平気。シュロモが気にすることはなにもないから」
「……だが」
「私の心配よりあなた自身に気を向けたほうが良いと思うわ。変身術、初回の出来は素晴らしかったけど、それ以降はちょっーー」
そこまで言うと、ハーマイオニーは慌てて口を噤んで、恐る恐るといった様子でシュロモの顔色を伺った。
シュロモは涼しい表情をしていたのだが、ハーマイオニーのハーマイオニーらしからぬ仕草に疑問を覚えた。
が、なにも言わなかった。
「ならば、今日はハーマイオニーの苦手な魔法薬学と、俺の苦手な変身術を復習しよう。噂によるとハロウィンから変身術と魔法薬学はクラブを開催するらしい。レベルが高いと聞く。出るためにも、それなりの実力を身に着けたい」
「あ、あらそうなの。それは初耳ね」
言いたいことはあるだろうに、それを呑み込んだシュロモ。
ハーマイオニーは、助かったと喜ぶ半面、何故だか悲しかった。何故、悲しむのか自

分でも分からない。

※

「……シュロモ。君に話がある」

「話し？　君が私にかい？」

大広間時、昼食を早く食べ終えたシュロモと、ドラコは魔法界のチェスをしていた。

魔法がかけられていて、声で指示を出すと駒が勝手に動くのだ。

しかも意思を持っていて、プレイヤーの指示が気に入らないと戦術に口出ししてきたり、相手の駒を取る時殺すような仕種をする、多少野蛮なチェスだ。

暇つぶしに始めたが、良い差し手同士でやると中々どうして面白い。

地味に白熱していた折、ドラコが言い難そうに口を開いた。

「……マグル生まれを擁護してるみたいで、あまり気が進まないけど。――あぁ、君のお友達？　そう、お友達に関して言っておきたいことが」

シュロモは、形の良い眉を釣り上げた。

「君のお友達だが、グリフィンドールで上手くいってないみたいだぞ？　言葉を選ばずに言うなら避けられてる。シュロモがいないときに泣いていることもあるらしい。一

応、純血が目をかける存在だから目をつけていたし、それに彼女は良くも悪くも有名だから、君の耳に入ってると思ったんだが――その様子だと初耳みたいだな」
「……恥ずかしながら今知った。人とのそういった機敏には疎いからね。……いつからだ？」
「あぁ……それが、その」
言い淀むドラコ。
シュロモは、少し焦った様子で身を乗り出した。
「何を躊躇ってるんだ？　言ってくれよ」
「４週間前。つまり、飛行訓練の翌日からだ」
「――ッ。図書室に行ってくる！　次の授業には必ず間に合うから安心してくれ」
シュロモは、矢の様に駆け出した。
目指す先は図書室。
何か悩んでいたのは分かっていたが、涙を流すほど思い詰めているとは全然知らなかった。
シュロモは自分が恥ずかしかった。
嫌われることを恐れて踏み込めなかったせいで、ハーマイオニーが泣いてしまったのだから。

図書室に入ると、シュロモは足音を忍ばせて、いつもの定位置へと向かった。
ハーマイオニーと逢瀬を楽しむ指定席に。
すると、そこからやはりすすり泣く音と嗚咽が微かにだが聞こえてきた。
いつもは輝かしい笑みと期待と羨望に満ちた瞳をしているのに、光り輝く眼は涙で曇り、眩い笑みは悲しみ一色になっている。
シュロモは、雷に打たれたような衝撃に襲われた。
電撃が足元から、頭の天辺にかけて走った。動けなくなったと錯覚した。
だが、目を閉じて心を落ち着かせると、咳ばらいをして声をかけた。
「やあ、ハーマイオニー」
「――ッ。シュ、シュロモ」
いきなり声をかけられたハーマイオニーはびくんと跳ね上がり、慌てて振り返った。
声の主は、案の定シュロモだった。涙を流すところを見られたくなかったハーマイオニーは、眦から頬を伝う涙を拭うが。
「君が泣いているのを、俺はもうばっちり見たよ。慌てて拭わなくてもよろしい」
「そう」
ハーマイオニーは拭うのを止めた。
「それで、どうして君は泣いてるんだ？　恐怖故に踏み込めず、友に言われるまで、ハー

マイオニー、君が泣いていることにまるで気付かなかった愚か者の俺だけど。そんな俺でも良ければ、君の話を聞きたい」
「あ、ははは。そう、よね。ごめんなさい。私、あなたと対等でいたくて、それで」
「対等に？」
「だって、私マグル生まれじゃない？けれど、あなたは王子様。純血も純血、しかもマグルでも知らない者は少ない『ソロモン王』の直系。マグル基準でもあなたは最古の王族の王子。私とは身分がまるで違うもの。だから、少しでも対等になりたくて勉強も頑張ったわ。楽しかったのは認めるけど、それでもあなたと少しでも対等になれるようにって。だから、私弱みを握らせたくなくて、少しだけ避けてしまったの、ごめんなさい」
「謝るのは俺の方だよ。君が俺に隠れて涙を流していたことにまるで気付かなかった。……それに血の貴賤だとか、身分だとか気にする必要はないよ？　君は俺と対等だ」
「け、けれど、釣り合わないわ。あなた座学も実技も出来るしハンサムだし……」
「聡明さの話をするなら、君は既にこの学年一の優れた魔女だ。君は気付いていないようだけど、ハーマイオニー。君も十分に可愛いよ。……だから、話しておくれ？　君が涙する理由を」
　いつものおちゃらけた様子は鳴りを潜め、至って真剣な眼差しでシュロモは、ハーマ

イオニーの答えを待った。頬を僅かに紅潮させたハーマイオニーは、うつむき呼吸を整えると、静かに言った。
「私、避けられてるの」
「……」
「飛行訓練の日、あなたは忠告をくれたわよね？　だけど私我慢できなくて、ついとやかく言っちゃったのよ。その後の決闘騒ぎでも色々あって。……私ね、おしゃべりだけど実はあまりヒトと接するのが得意じゃないの。だから、遠慮なしにずけずけ言ってそれで皆から避けられて……頭でっかちなのよ私は」
「他人にずけずけ踏み入ってヒトを少々不快にさせるきらいは確かに否定できないな」
　それは、人との会話経験が欠落しているシュロモでさえ初対面時に感じたのだから、他の人間はことさらに感じたことだろう。だから、シュロモであっても否定できなかった。
「ひどいわ。そこは庇ってくれてもいいじゃない」
「ハーマイオニーが求めているならいくらでも庇うし歯の浮くようなセリフだって吐くが、少なくとも今君が望んでいるのは否定だ。それくらい愚かな俺にでもわかる」
「……私なりに上手くやろうとしたのよ？　だけど、当たりをキツく言っちゃって。教えてあげてるつもりでも、自慢にしか聞こえないって。気付いたら、私孤立してた。

……シュロモの前じゃ、泣きたくなかったから我慢してたけど辛くて悲しかったわ」
「俺が思うに君は随分とグリフィンドール的ではない。むしろ――」
「レイブンクロー？」
「そうだ。君は知的探求心と個人達成感を求める姿は獅子というより鷲の素質に思える。目立ちたがりで誇り高く仲間の共感を求める獅子の中で、孤立するのは当然の帰結であってハーマイオニー、君が悪いわけじゃない」
「……そうね、私でも時々そう思うわ。あの時、見栄を張らずにレイブンクローで良いって言えば良かったって。あなたも、レイブンクローかスリザリンで悩まれたんでしょ？」
「ご名答。どちらかと言うと、レイブンクロー的スリザリンらしい。……そして、君が孤立する最大の理由が一つ、――たった今分かったよ。ハーマイオニー、君は今も俺に隠し事をしているね」
「……してないわ。孤立してる理由はこれで全部よ」
　ハーマイオニーは目を伏せた。明らかに動揺している。
「確かに獅子は身内の団結を好むが……多少異端だからと爪弾きにするほど狭量ではない筈だ。ましてや、ちょっとのアレコレで女の子が一人泣くほど避けるものか。まだ一ヵ月しか経ってないのに」

一ヵ月で女の子が一人で泣くほど追い詰めるとは思えない。
ドラコの口から聞く、ドラコの父のグリフィンドールへの所感を何度も聞いたが、それを総括するとグリフィンドールは獅子の名違わず実力社会である。行動力と、実力を示し勇敢的行動を取る者が持て囃される。
だが同時に、弱きを助け、時には団結して共通の敵に立ち向かう結束力の強い騎士道の寮でもある。
女性も勇猛な獅子でなければならないが、入学したての女子を泣かせることまではしない筈だ。
ならば、ハーマイオニーの行動の何が、獅子の琴線に触れ、群れから弾かれたと言うのか。
「君が孤立し、泣いてしまうほど避けられている理由は俺（スリザリン）だね、ハーマイオニー」
「……」
「さしもの獅子も、蛇とつるむ異端がいれば狭量になるか。グリフィンドールとスリザリンの仲の悪さは千年の歴史があると言う。俺と仲良くする姿が話題になって、それで君は孤立したわけだ、ハーマイオニー。違うかい？」
「……正解よ、その通り。さすがは学年一の魔法使い様、お見事な推理ですこと」
「……レイブンクローになれば良かったわ。そうすれば、あなたもレイブンクローを選

んでいたでしょう?」
「それは勿論。そしたら、このような煩わしい柵も消えていただろう。君の孤立を解決する手段だが……俺と会うのを止めよう」
「……は?」
「俺との交流を完全に断ち切れば君は獅子の群れに歓迎されるはずさ。俺とこっぴどく喧嘩して訣別すれば、間違いを自分で清算したと認められるさ。君と話せなくなるのは悲しいが――」
怒涛の勢いで畳みかけるシュロモの言葉に、ハーマイオニーは頭が真っ白になった。
「そ、それだけは絶対にいや! あなたと一緒にお話しができないなんて、そんなの私耐えられないわ」
と、大声で叫び終わりハーマイオニーは肩で息をした。
「冗談だよ、冗談。解決策の一つとして提案しただけさ。……それよりも、思ったよりも君に大事だと思われてて俺は嬉しいよ」
ニヤニヤと嬉しそうに言うシュロモを見て、ハーマイオニーは先程感情が赴くままに何を口走ったのか思い出して、顔がみるみる赤くなった。
「もうしらないっ」
ハーマイオニーは机に突っ伏した。

「やっと元気が出たみたいだから、嬉しくてつい揶揄っただけだよ。そんなに拗ねないで」
「ふんっ」
「……孤立のことなら気にしなくて良いよ、ハーマイオニー。君の素晴らしさに、君の良いところに気付いて友達になってくれる人が必ず出てくるから」
「本当に？」
ハーマイオニーは突っ伏したまま、顔を上げずに問い掛ける。
「王の尊き御名に懸けて誓う。君に素晴らしい友が出来るとも」
本当は嫌だが間違いない。
だって、復讐と虚無に燃え尽きた心に火を灯し、今も俺がこうして生きているのは間違いなくハーマイオニー、君のおかげなんだから。
絶対に、素晴らしい友達ができるようになる。

ハロウィンにトロールやっつけて地固まる

シュロモが、それを見かけたのは本当に偶然だった。
トロールが迷い込んだ。
クィリナス・クィレル教授が、そう叫ぶと同時にパニックに包まれた大広間。
ダンブルドアが杖の先から、爆竹の音を出して鎮まらせた後のことだ。額に稲妻のある少年と燃える赤髪の少年が、寮とは別方向に消えるのを目にしたのだ。
「あいつら……まさか」
今晩はハロウィンだというのにハーマイオニーの姿が大広間になかった。豪華な晩餐だというのに。
探してもいなかった。そして、慌てて何処かに消えるハリーとロン・ウィーズリー。
点と点がつながってシュロモの中で、嫌な想像が浮かび上がった。
「ちょっと、シュロモ。一体どこに行くって言うんだい？　寮はそっちじゃないだろう」
「……ドラコ」
ハリーたちの後を追いかけようと踵を返さんとした、まさにその瞬間。
ドラコが待ったをかけた。

「君は高貴なんだ。荒事は教師陣に任せるべきだぞ？」
「ウィーズリーが良い機会だから女子トイレを覗こうって巫山戯たことを抜かすのを耳にしたからな。あれでもウィーズリー、グレートブリテンを代表する２８一族の末裔だ。止めなければ」
「……君一人で止めると良いさ。僕は教授に報告する。徒労に終わるだろうね」
「徒労で済むならそれに越したことはない。感謝するよ、ドラコ」
ドラコは不満そうな顔をしながらも、教授たちを呼びに行った。シュロモは素晴らしい友を持った喜びを噛み締めながら、ハリーたちを追うために走り出した。
しかし、僅かな問答のせいで見失ったのも事実。さぁどうするかと途方に暮れてしまう。
空中から火が燃えると、真紅の孔雀の尾羽根が現れた。
気紛れな忠臣フェニアの施しだろう。
「アヴェンジグイム（追跡せよ）」
羽を宙に放り投げると指先を向けて呪文を唱えた。指先から黄色い光が迸ると、羽は落ちることなく空中に浮いて何処かへと飛んでいった。シュロモは、それを走って追いかけた。
頼むから間に合ってくれと祈りながら、そしてホグワーツの護りを司る半月メガネを

呪いながらシュロモは走ったのだ。

※

シュロモは特別な人だった。高貴な生まれで、マグルの基準から見ても魔法界から見ても由緒ある家系の末裔。

人当たりもよく、聡明で勉学に秀で、それでとてもハンサムな優秀な魔法使いである。あのスリザリンで、居場所を築きドラコ・マルフォイやパンジー・パーキンソンと仲良くしている。教えを請われれば丁寧に教えてくれるし、ユーモアもあってスリザリンなのに密かに他寮からも好ましく思われている彼と、単なる頭でっかちの小娘では住む世界がまるで違った。

ロン・ウィーズリーとハリー・ポッターは素質はあるけど勉学を疎かにする性分と面倒臭がる一面も相まって結果として上手く行っていない手の掛かる級友――ハーマイオニーにとって二人はそんな存在だった。真面目にやれば出来るのに何故勉強を疎かにするのだろう？　それに校則は破るわ、教授に喧嘩は売るわでやんちゃ坊主だとも思っていた。

だからハーマイオニーは二人のことを特に目を掛けていたのである。少しでも勉学に励んでもらえるように口うるさく注意するのも、お節介を焼くのも全部ハーマイオニーからすれば善意だった。

だがハーマイオニーの善意を受け取るには一年生の獅子はまだまだ未熟で、早熟した狡猾な蛇のように優しくはなかった。お節介焼きのハーマイオニー、彼女に降り掛かる悪意は蛇と密会してることもあり、幼い子どもが受け流すには酷なほどであった。

シュロモには、ハーマイオニーの良さに気付いて友達になってくれる人が必ず現れて、グリフィンドールに受け入れられる日が来ると言われていたがハーマイオニーの心はもう決壊する寸前だった。

そんな一杯一杯な少女の心に、トドメを刺したのは妖精の呪文の授業だった。

きっかけはハーマイオニーのお節介だった。

不適切な呪文や、間違った発音で呪文を唱えると、魔法が暴走して時として命を奪うと教科書を読んで知っていたハーマイオニーは、隣で杖を振り回してデタラメな発音で呪文を連呼するロンにすかさず注意した。目に入れば危ないし、魔法が暴走したら大変なことになる。

「違う違う違う。そんなに杖を振り回したら危ないでしょ。それに発音も違うわ。ウィン・ガー・ディアム・レヴィオー・サ。貴方のはガーが短すぎるわ、もっと綺麗に伸ばさないと」

本当は優しく言うつもりだったのに、つい言葉がキツくなってしまう。

「スリザリンなんかと仲良くしてる裏切り者は言うことが違うね」

ハーマイオニーの言葉に、ロンはむっとした顔で文句を言う。

「シュロモの話は関係ないでしょう。それよりと今は浮遊呪文の時間よ。正しく発音しないと危険よ?」

「そんなにご存知ならお手本どうぞ?」

いいわよと言うとハーマイオニーは袖を捲くって杖を振った。

「ウィンガーディアム・レヴィオーサ」

ロンは失敗することを期待したのだが、ロンの期待とは裏腹にハーマイオニーの羽は物の見事に浮かび上がり、フリトウィック教授の目に留まり得点されるに至った。

「だから、誰だってあいつには我慢できないっていうんだ。まったく悪夢みたいなやつさ」

ロンの言葉が聞こえた時、そしてロンがハーマイオニーに対して言っていることを理解すると、少女の薄氷の如く脆い精神は砕けた。

ハーマイオニーは、完全に自分は皆の嫌われ者なんだと理解したのだ。
ハーマイオニーは涙で顔をくしゃくしゃに歪ませながら、走り出した。誰にぶつかったのか、涙で濡れた視界には映らなかった。

（どうして私は、シュロモみたいにいかないのよ。憎まれ口しか言えないし、私は皆の嫌われ者だわ）
トイレでさめざめ泣くハーマイオニー。
どうしてシュロモはあのスリザリン寮でうまくやっているのだろうか。
どうして自分だけ、こんな爪弾き者なのか。みんなのことを思って言っているのに。こんなことになるなら、レイブンクローに組み分けされれば良かったのに。そうすればシュロモと一緒になれたのに。
負の感情と後悔ばかりが渦巻く。
だけど、ひとしきり泣き腫らすと、ハーマイオニーは涙を拭いトイレから出た。
泣いてばかりいる訳にはいかないのだ。大切な友達シュロモは、勤勉で知識欲旺盛でグズグズしていたらあっという間に突き放されてしまう。対等でありたいハーマイオニーとして、そんなことは許容できない。
それに今日はハロウィンなのだ。女子トイレで泣いて過ごしてやるもんか。

そう思ってトイレを出たはいいのだが。

そこに、大きな怪物が立っていた。

４メートルを超える巨大な怪物。足は短いけど木の幹のように太く、墓石のような鈍い灰色の肌にゴツゴツした巨体。禿げた頭はとにかく小さくて、胴が大きすぎてココナッツがちょこんと乗ってるみたいだった。腕は異常に長くて、手にした巨大な棍棒が地面を引き摺られている。

「きゃああああああああああああああ!!!!」

教科書を読んで、頭の中に叩き込んだ呪文の数々も、トロールの習性も全部吹き飛んでハーマイオニーはただ悲鳴をあげることしか出来なかった。

殺されるかも、とそう思った瞬間に誰かが助けに来た。

「こっちに引き付けろ!」

ハリーは無我夢中に言いながら、蛇口を拾って壁に叩き付けてトロールの注意を引き付けた。

恐怖で動けないハーマイオニーを、ハリーとロンが獅子に相応しい勇気と行動を以て救い出してくれた。ロンが、ハーマイオニーの指摘通りに魔法を使って、トロールを浮遊呪文で撃退したことに感動すら覚えた。油断しきった３人。

「ふんがあああ」

はっと頭を上げると、そこには先程よりも大きいトロールが一匹立っていた。
「エクソパルソー（爆破）！」
鋭い声が聞こえると、トロールの手に持つ棍棒が粉々に爆発した。
そして、今までに見たことがないくらい張り詰めた表情のシュロモが疾風みたいな速さでトイレの中に駆け込んできた。
鬼の形相で、凶悪なトロールを睨むと、シュロモは杖を振るい鋭く唱える。
「フリペンド（吹き飛べ）！」
５メートルを超える巨体が、弾かれるように吹き飛び、鈍い音を響かせて壁に激突した。トロールは呻き声を上げると、それっきり動かなくなった。
「あ、ありがとう。シュロモ」
何でこんな場所にいるのか疑問で言葉が出ないハリーやロンに代わり、ハーマイオニーがお礼を言う。しかし、――。
「おそらくこっちです、スネイプ先生！」
ドラコの先生を呼ぶ声が聞こえると、マクゴナガル教授、スネイプ教授が真っ先に飛び込んできて、クィレルとドラコがその後に続いた。
棍棒が頭に落ちて気絶するトロールと、壁が陥没する程力強く頭からぶつかり息絶えたトロールを見て４人は一瞬声を失った。

「一体全体、これはどういうつもりですか？」

マクゴナガル教授の声こそ平静だが、静かな怒りがあふれていた。スネイプ教授は、トロールをそれもシュロモが倒した方の死骸にしゃがみ込んで何かを調べていた。

ハリーは思わずロンを見たが、ロンは杖を構えたまま突っ立つだけだった。ハーマイオニーを見る。ハーマイオニーはシュロモを見ていて、シュロモはただ平然と佇んでいた。

「あなたたちは運が良かった。殺されなかっただけで死んでいた可能性の方が多いにあったでしょう。それで本来なら寮にいるべきあなた方がここにいる理由を教えていただけますか？」

マクゴナガル教授の咎める言葉に、ハリーとロンはどうしようかと言い淀んだ。ハーマイオニーが女子トイレに籠もって泣いていたという不名誉な事実を黙っておいた方が良いと思ったからだ。

シュロモはあいも変わらず傍観の姿勢だ。スネイプ教授の非難する視線を、シュロモは涼しげに受け流す。何かあったら責められるのは寮監であるスネイプだというのに、シュロモはあたかも気付かぬように振る舞う。

「あ、あの聞いてください！　――二人とも私を探しに来たんです」

ハーマイオニーやっと立ち上がれた。死の恐怖をやっとこさ乗り越えたのだ。

「私がトロールを探したんです。私一人で何とかなると思ったんです。ー一本で読みましたしシュロモと一緒に勉強もしてたので、自分でもなんとかなるって」
「もし二人が見つけてくれなかったら、私、いまごろ死んでいました。ハリーは杖をトロールの鼻に刺し込んでくれて、それでロンはトロールの棍棒でノックアウトしてくれました。二人とも誰かを呼びにいく時間がなかったんです。二人が来てくれた時は、私、もう殺される寸前で……その後もう一匹トロールが襲ってきて、シュロモが駆けつけてくれて爆破呪文と衝撃呪文で助けてくれました」
マクゴナガル教授が射抜く目を向けてくるので、ハリーとロンはその通りです、という顔を装った。
はぁ……と溜め息を吐くとマクゴナガル教授は、シュロモを見た。
「とミス・ハーマイオニーは言っていますがどうなんですか？　ミスター・シュロモ」
「私は途中から来たので詳しくは分かりませんが、概ねその通りかと。……最近私と親しくしているが故にグリフィンドール内で孤立していると噂を耳にしたもので。もし私の目の届く範囲で事を起こせばどうにかしてやろうと目を光らせているのですが今晩、大広間にハーマイオニーがいないことに気が付きましておかしいなと思っていたのです。
どうしたものかと悩んでいたところハリー・ポッターとロナルド・ウィーズリーがこ

そこそ寮とは別の方向に行く姿が見えまして。嫌な予感がしてドラコに教授を呼びに向かわせたんです。その後すぐに慌てて追いかけたのですが、追いつくかどうかはソロモンの匙次第ソロモンの匙次第　一か八か的な意味合いの魔法界慣用句。偉大なる大魔法使いソロモン王は運命すら操るという伝承があり、それを元に結果が分からないものを天任せにすることをソロモンに委ねるとか御心次第とか匙次第と言う様になった。※オリジナル慣用句でした。間に合って良かったと思っています」

「……どう思われますかスネイプ教授。その、あなたの寮生の判断は？」

マクゴナガルが話を振ったことにより、スネイプは気を取り直して、シュロモに向き合った。

「ミスター・ドラコの判断は迅速で正解であったと言えますかな。友の安否を憂い、誘惑を絶ち我輩を頼ったことは評価に値する。しかし」

シュロモを、咎めるように目を細めて見るスネイプ。

「ミスター・シュロモについては些か冒険心が過ぎますな。知識欲と行動力の化身であることは吾輩は重々承知しているが、君にはもう少し立場を弁えた行動をして欲しいものですぞ。しかし、まあ物の見事に棍棒を粉々にした爆破呪文と、トロール一匹を壁にめり込ませた衝撃呪文の出来栄えは吾輩としては目を見張るものがあると言わざる得ませんな。スリザリンらしい観察眼と狡猾さだと我輩は思います。ミスター・シュロモ

を5点減点しよう。そして――」

シュロモをじろっと見て、その後憎々し気にハーマイオニーを睨み、ハリーとロンを無視すると。

「他寮とはいえ級友を命の危機から守る為に身を挺した覚悟と、素晴らしい魔法を見せてくれたことに敬意を表し15点与えよう。ただ勘違いしないでくれたまえ。君の勇気を褒めただけであって、蛮勇を認めたつもりはない。――我輩から以上だ。グリフィンドールのことはグリフィンドールの寮監に任せますぞ、マクゴナガル教頭」

「わかりました。では、ミス・グレンジャーから5減点します。ミスター・シュロモ……は少しやんちゃな部分があるのでこの際除外しますが、ミス・ハーマイオニー、貴方はもう少し賢い魔女だと思っていました。失望しましたよ。――中々に良き友人を持ってるようですね、ヒトとの繋がりは何よりも大切な宝です。大事になさい。さ、怪我がないなら3人とも寮に戻りなさい。他の生徒たちがハロウィンパーティの続きをしていますよ。ミスター・ドラコも寮に帰って結構です。報告ありがとうございます」

マクゴナガル教授が頬を綻ばせながら言うと、3人は勢いよくトイレを飛び出した。ハーマイオニーだけとハリーはすれ違いざまにちらっちらっと何度か見たが、シュロモは微笑み返すだけに留まる。

さて、もう用はないとシュロモも帰ろうとしたのだが。

「お待ちなさいミスター・シュロモ。スネイプ教授から貴方にお話しがあります。私はダンブルドア校長に報告しに行きますのでこれで失礼します」

マクゴナガル教頭に止められて、トロールが二匹転がっている女子トイレに、シュロモは野郎と二人きりになってしまった。

「先程も言ったが、もう少し立場を弁えて行動して欲しい物だな。何かあれば、我輩が魔法大臣と校長から責められるのだ。君の蛮勇で吾輩がなじられるのは酷く不愉快だ」

「すみません、スネイプ教授。ハーマイオニーに危機が差し迫ってると思ったら考えるよりも先に体が動いてしまったのです。自分でも思いだにしなかった新たな一面に驚いていますよ。しかし、二度目がないとはお約束できません。同じことがあればまた同じ行動を取るでしょうから」

「どうしてか聞いても良いかね?」

「ハーマイオニーが好きだからですスネイプ教授。だから、私は何が何でも彼女を守ります」

澱みない晴れ渡った笑顔で宣言するシュロモ。そんな、シュロモを見てスネイプは哀愁やら怒りやらを混ぜた苦虫を噛み潰したような顔をして、小さく唸った。

その目に浮かぶのは、後悔とも懺悔とも似つかぬ何かに思い馳せる微かな灯であっ

た。
「それよりもスネイプ教授。白の老人に伝えておいてください。生徒が『城にトロールが入り込むなんて、万全な護りとやらはどうなってるんだ』と抗議していたと」
そんなスネイプ教授の様子を知らずに、シュロモは若干声に怒りを滲ませて敬愛する寮監に伝言を頼んだ。
スネイプ教授は、逡巡した後に深い溜息を吐いて、短く言った。
「……良かろう」
「ありがとうございます、私はもう帰っても？」
「……良かろう。まっすぐに寮に帰りなさい」
「心配なさらずとも、個人的な理由で冒険する程私に勇気はありませんよ。それでは」
シュロモは踵を返してトイレを後にすると――。
「助けてくれてありがとう！」
栗毛の塊が突っ込んできた。
何事かと思ってみると、ハーマイオニーだった。それに、ハリーとロンまでいる。
「貴方のいう通りだったわ。私にね、あなた以外の友達が出来たの！　それも二人も！」
「僕、友達になるなんて一言も言ってないぞ」
ロンが突き放すように言うと、ハーマイオニーは目を潤ませた。

「あら、違うの？」
「違わないけど」
　ロンはたじたじになって、言葉をすぼませる。
「僕たちを助けてくれてありがとう。シュロモ」
「ぶっちゃけ言うとハーマイオニーを救うついでだから気にする必要はないよ？　ポッター」
「だけど謝らせてよ。汽車の中であれだけ楽しく話してたのに、寮が違うからなんて理由で無視するなんてどうかしてた。スリザリンに入ったって君は君なのに、本当にごめんなさい」
「そこまで言うなら、うん、許すよ。そして、私と友達になってくれよ」
「え、いいの？　自分で言うのもなんだけど僕って酷い奴だよ？」
「気にする必要なんてさらさらないさ。『生き残った男の子』同士仲良くしようぜ。生き残った兄弟（リビング・ブラザーズ）、良い響きじゃないか」
　ハーマイオニーを身を挺して守ったことによって、シュロモの中のハリー＆ロンに対する評価がうなぎ上りに上がったのだ。ハリーは、箒に乗れる親の七光りから努力家で勇猛果敢な箒乗りにランクアップしてる。
　だから、シュロモはハリーと仲良くなりたかった。友達が少なすぎて、友達に飢えて

るのも理由になくはないが。
「いいねその響き！　シュロモと仲良くなれて僕はとても嬉しいよ！」
ハリーは嬉しくなって、シュロモと握手した。ハリーは嬉しそうに笑いながらちらちらとロンを見る。
ふい――ロンは顔を逸らした。
ハーマイオニーが咎めるように短く一回咳払いをする。
ロンはシュロモを真正面から見る。
「えっと、その～。あの～」
意図せずとも鋭く力強い眼差しに、ロンは気圧されしどろもどろになるが、間髪おかずに咎める咳払いがしたので、意を決して謝罪をした。
「僕も、ごめん。君スキャバーズのことを褒めてくれたのに、マルフォイなんかと仲良くしてるから勝手に嫌な奴扱いして避けてた。えっと、僕たち友達だよね？」
ハーマイオニーとハリーが、ロンのことを微妙な顔で見るがロンの視界には一切映らなかった。
シュロモのキラキラした目だけが、ロンの視界に映っていた。
「勿論だともロン。正直言うと親しみ難いイメージがあるのか、友達と言えるのはハーマイオニーとドラコ、パンジーしかいなくて寂しかったんだ。君も、私の友達になって

くれて本当にうれしいよ」

こうしてシュロモ、ハリー、ロン、ハーマイオニーは共通の敵を乗り越えたこともあり、寮の垣根を超えた友情が芽生えたのであった。

最初の頃は、図書館での勉強会にハリーとロンも出席していたのだが、あまりに高度で複雑な内容についていけず直ぐに不参加になったのは言うまでもない。意図せずとも、４人の友情は秘密になったのだ。

放課後の魔法薬クラブ

「えっと、それは何ですかスネイプ教授？　ラブレターですか？　だったら私はハーマイオニー一筋なので、送り主にやんわりとお返ししてほしいのですが」

大広間でいつも通り、ドラコやパンジーらと食事を楽しんでいた時のこと。

スリザリンが親愛なる寮監スネイプ教授が、手紙をわざわざ直接渡しに来てくださり、シュロモはラブレターと判断して丁重にお返ししたのである。

スネイプ教授には苦労を掛けるが、文通する仲ではない。故に、ラブレターを渡す代行と判断したのだが。

「――招待状だ馬鹿者。我輩は素質ある者に、その才能を伸ばす場を提供している。……耳の早い君のことだ、どうせ既に知っておろう。これは吾輩主催の魔法薬クラブの招待状だ。既にドラコにも渡してある。参加するしないは自由だが、授業では教えぬ我輩の技を手自ら伝授する唯一の機会だ。後学の為に、参加しておいた方が君の為になるのではないかね？」

「これが噂の魔法薬（ポーション）の招待状ですか、なるほど。非才の身ながら招待頂けるとは光栄の至り。謹んでお受けします」

スリザリンの堅物が揃って絶賛する、素質ある者には堪らない学びの場。
それに参加出来るか、才能を感じるドラコと違いシュロモ自身は賭けであったのだが何とかお眼鏡に適ったらしい。
シュロモの非才宣言に、スネイプは苦笑いを浮かべる。
「君が非才ならば今年の一年生はその殆どがウスノロになってしまうな。卑下は持たざる者からの顰蹙を買うぞ?」
「基本に忠実なだけです。一代で新薬を何種も作った先祖には遠く及ばない」
だがシュロモの自身に対する魔法薬のスタンスは変わらない。天文学、占い、呪文、呪詛、変身術、あらゆる魔法に秀でるがメルフォティート一族なのだが不運なことに魔法薬だけはシュロモは得意だと思えなかった。
変身術もそうだが、呪文を扱う時に感じるセンスを、魔法薬ではまるで感じない。おかげで出来上がる魔法薬はどれも優良を上回らない。
「……その基本に忠実すら出来ぬ者はごまんといる。まぁ、良い。最初の活動日は来週に行う。良いな?」
「ご丁寧にどうも。それより、ハーマイオニーは招待されました?」
聞き耳を立てていたドラコは露骨に顔を顰め、スネイプ教授自身も一瞬ではあるが強張った。

「……彼女は招待していない」
「何故です？　私ですらお眼鏡に適うならば、彼女なら尚の事資格はあると思いますが？　彼女は魔法薬ではドラコに次いで秀才ですが」
「基本に忠実だが、本当にこれで良いのか詮索しているであろう？　盲目的に従うのと、疑いながら従うのではまるで内容は違う。アレは教科書を鵜呑みにし盲目的に従っておる。したがってあー、彼女には、素質を感じなかった。故に招待していない」
「それを判断するには、まだ早いのでは？　ハーマイオニーは確かに、その教科書を信仰している節がありますが人に教える点においては優れていますよ？　教えるというのは高度な理解と知見が求められる、魔法薬の理解も十分な筈です。グリフィンドールだから招待しないなんてことはしないでしょう？　ならば彼女を、私は推薦します」
推薦すると、そう宣うシュロモ。
スネイプ教授は深い溜息を吐いた。まったく、推薦を漏らしたのはどこの誰だ？
あれは、上級生に与える特権だろうに。
大体どうしてシュロモは……。
「口の軽い者がいるようだな。……良かろう、そこまで言うのだ。ミス・グレンジャーを我がクラブに招くが良い。ただし、クラブの内容について行けず、狼狽することになろうとも我輩が預かり知るところではないとだけ言っておく」

スネイプ教授に出来る精一杯の嫌がらせ。しかし、シュロモは眩い笑顔を浮かべるだけで、意に介した様子がなかった。

「ご了承いただき嬉しいです、寮監。ご心配もありがとうございます、ただ彼女はとても素晴らしい聡明な魔女なので苦戦こそするかも知れませんが心配はいりませんとも」

輝かしい笑顔で、一点の曇りもない晴れやかな瞳は、ハーマイオニーのことをシュロモが全幅の信頼を寄せている証である。シュロモは、ハーマイオニーが狼狽し挫折することはないと信じているのだ。

スネイプ教授は、シュロモから顔を逸らすと直様ローブをはためかせ踵を返した。

「ふん、そうなると良いな」

「君は、グレンジャーのことになると凄いな?」

スネイプ教授が去ったあと、ドラコはぽつりと漏らす。

スネイプ教授は、スリザリンが誇る素晴らしい寮監だ。聡明で、智慮深く優秀な魔法使い。

だが、しかし。良き教授ではあるが話しやすいかと問われれば一部の例外ドラコやシュロモを除きその限りでない。

厳格が故に、気さくに話し掛けにくいのがスネイプ教授なのである。だが、このシュロモという若き魔法使いは、魔法薬の賢者相手に軽口を聞いてみせ軽い口論を繰り広げ

て見せた。
ドラコが抱いた感想は、未だスネイプ教授に話し掛け辛いスリザリン一年の総意であり、その日からシュロモは1年生の英雄になった。

――閑話休題（冗談はさておき）

次週の金曜日の放課後。
シュロモは、図書室に辿り着くといつもの指定席に向かう。そこには、案の定ハーマイオニーが一人座っていて、早速勉強をしている。
シュロモは、ほくそ笑むとハーマイオニーに近付く。
「ハーマイオニー、少し俺に付き合ってくれないか？」
「へ？　ふぇ!?」
ハーマイオニーは、珍しく狼狽（うろた）える。
顔を真っ赤にし、慌てふためくが。
「あ、あなたいきなり一体何を……!?」
「スネイプ教授から、君を放課後の魔法薬（ポーション）クラブに推薦するご許可をいただいたんだ。今日は、今年度初の開催日だ、是非ハーマイオニーも一緒に来てくれ」
シュロモの続く言葉に、ハーマイオニーは羞恥から怒りへと表情を変え、烈火の如く

怒り初めた。
「このお馬鹿!! もう知らない!」
ヘソを曲げたハーマイオニー。
彼女の機嫌を治すのにシュロモは5分掛かったのは言うまでもない。

「このクラブでは授業では教えない我輩の技を伝授する。諸君らは、素質がある。魔法薬という科学を探求し、栄光をも手にする素質が。伝授してやろう魔法薬の真髄を。素質ある諸君らでも混乱するやも知れん。
だが、期待しておる。教科書は、万人でも同じ品質の魔法薬が出来る様に厳選された手順が乗っておるが、魔法薬に秘められた真の効能を引き出すにはアレンジが必要になる。個人に合わせ効能を調整せねばならんこともあろう。あるいは魔法薬学者を志すならばアレンジは必須だ。諸君らが魔法薬の真髄を6年かけて極めることを我輩は期待する」
いつもの地下牢にて、スネイプ教授は黒いローブをはためかせ演説を行った。
そして、シュロモの隣に座るハーマイオニーをじろっと見るとスネイプ教授は口を意地悪く釣り上げた。
「幸運にも推薦でクラブの参加資格を得たラッキーにも、我輩は期待する。君たちを推

薦してくれた者の顔に泥を塗らぬよう、せいぜい食らいつくが良い。以上だ」

「……っ」

ごくりとハーマイオニーは息を呑む。

まるで、ハーマイオニーに向けて言っているようにハーマイオニーは聞こえたのだ。

「では、本日はニガヨモギの特性について伝授しよう。ニガヨモギは、多くの魔法薬に必要にされる薬草であるが、実は調合者の魔法力次第で薬効に作用することが知られている。教科書では、その差分を意図的に消す工程が組まれているがそれを活かすには――」

そしてスネイプ教授は、凄まじく高度な知識を1年生に与えはじめる。それは授業では決して扱わない内容であり、確かに魔法薬の真髄と呼べる知識である。

シュロモのフォローも、あってハーマイオニーも食らいつき、魔法薬に知見を深めたのは当然のことである。

今世紀もっとも偉大な魔法使いと、もっとも尊い魔法使いの密会

クィディッチとは、魔法界において広く愛される普遍のスポーツのことである。その人気たるや、国境を超えて東は極東の日本国魔法コミュニティ、西は合衆国魔法コミュニティまで世界中の魔法使いたちを魅了してならない。

遠く離れたエルサレム魔法社会ですら、クィディッチが流行ってるのだからその人気は世界的といえる。

さて、そんなクィディッチだがシュロモも実は密かに熱中している。等どころか絨毯の才能すらないシュロモだが、見る分ならクィディッチ愛好家と言っても過言ではない。

だから、マルフォイに寮対戦のクィディッチを見ないかと誘われてシュロモは非常に嬉しかった。しかし、そこでシュロモはある問題に直面したのだ。即ち、ハーマイオニーのいるグリフィンドールを応援しハリーを応援するのか、それとも我らがスリザリンを応援するのか、である。

彼女と友人の属するチームを応援するのは吝かではない。ないのだが、親友と母寮を

応援するのもやってみたい。だからシュロモはどっちにも付かないで、純粋にクィディッチを観戦することにしたのであった。

ちなみにこのどっちつかずの対応に、シュロモの関係者は賛否両論の感想を漏らしたという。

「君らしいといえばらしいか」とはマルフォイの感想で。

「……優柔不断ね」とはハーマイオニーの苦言である。

クィディッチの競技場は、狭い校内とは言え中々に広くそして熱狂に包まれていた。

グリフィンドール対スリザリンの試合は寮の特性が如実に出ていた。正々堂々、騎士道精神のプレイの獅子寮グリフィンドールと、勝利に貪欲で狡猾なプレイを繰り広げる蛇寮スリザリン。相反する、二つの寮の対戦は泥臭く熱い。

「流石はスリザリンだね。蛇寮だけあって粘り強い」

「そうだろう？　蛇はすべてのことに手を抜かないんだ。栄えあるスリザリンは常に勝利に貪欲であれ」

「素晴らしい訓戒だ」

と、雑談が弾んでいた所で、事件は起きた。

「ハリーの箒の挙動、可笑しくないか？」

「……確かに。おかしいな」

シュロモとドラコの目と鼻の先で、まさにハリーの箒がおかしな動きを見せたのである。突如として、制御を失い、暴れだしたハリーの箒。それはまるでハリーを振り落とそうとしているようにも、ハリーを殺そうとしている様にも見えた。

シュロモはさっとハリーに向かって手を掲げた。少なくない日々を共に過ごしたドラコは、シュロモが魔法を使う気であることに気付き、行動を咎める。

「何するつもりだ？」

「呪いを解いてみようかなと」

「何で君が？」

友が、不倶戴天の天敵ハリーを助けると聞き、ドラコは露骨に不機嫌になった。

「誰か死ねば魔法省が俺の近辺にしゃしゃり出てくる。闇祓(オーラー)いに纏わり付かれた学校生活を送るのは君も嫌だろう？　私は、嫌だ」

ただでさえ、ロンドンに滞在していた時、シュロモの近辺で厳戒態勢が敷かれていたのだ。シュロモの近くで、それこそハリーが死ねば間違いなく英国魔法省がしゃしゃり出て来るに決まっている。

そうすれば、シュロモが夢見るゆったりしたスクールライフをおくれなくなる。最もな理由で、早口にまくし立てるシュロモ。ドラコのシュロモを見る目は冷ややかだ。

「本音は？」
「ハーマイオニーにかっこつけたい。……それと、私の呪文が何処まで通用するか試してみたいというのもある」
「まったく君という奴は……」
極力、ドラコを視界の端に追いやり、シュロモは呪文を唱える。
「フィニート・マレディクティオ」
フィニートの呪いに限定した最上位呪文であったが、ハリーの跨がる箒に変化はない。相も変わらず暴れ牛の挙動だ。
聞いていない……というよりも。
「……弾かれた？」
シュロモは空かさず、手を握って開く。すると掌の中に、金色の鱗粉を纏う杖が現れたので、シュロモは杖を握り締めて。
「レヘラヘム・クララ」
杖の先から光が迸り、白の光線が放たれる。放たれた光線が、ハリーの箒に吸い込まれる様に当たるも、呪文は箒の表面で弾かれ霧散してしまう。
わかってはいたことだ。箒という高度な魔法が掛けられた道具に干渉するのに並大抵の魔法では適わない。闇の魔術、それもかなり高度な術でないといけない。

杖無しでは解除出来ず、杖を使い上位の呪文を唱えても解除出来ない。シュロモの力量は1年生としてはずば抜けていても、まだまだヒヨッコの域を出られずにいるのだ。

力量不足を痛感したシュロモは素直に観客席を見渡す。術者を見つけ出し直接叩けば、呪文は止まるはずだ。

「クィリルか、寮監か……」

怪しいのは二人に一人。じっと瞬きすらせずにハリーを睨みつけるスネイプ教授を怪しむべきか、それとも同じくハリーを一心に瞬きせずに見つめるクィレル教授を疑うか。

片やハリーを嫌う者で、片や授業すらままならぬ臆病者。瞬時に考えを張り巡らせたシュロモは狙いを定め、杖を構える。

「ヴェンタス（吹き飛べ）」

杖の先から風が巻き起こり、旋風になるとクィレル教授を吹き飛ばした。途端に止まる箒の挙動に、シュロモは胸を撫で降ろす。シュロモの勘は正しかったのだ。

その直後にスネイプ教授の座る近くでボヤ騒ぎが起こり、シュロモは思わず吹き出した。近くで栗毛を見たからだ。

ハーマイオニーですら迷わずに疑ってしまうとは、我らが寮監の人望は思ったよりないようだ。

「スネイプ教授、折り入ってお願いがあります」
奇しくもグリフィンドールに敗けた、夕方のこと。シュロモは、スネイプ教授に紙切れを手渡した。

その日の夜、シュロモはある魔法使いの元に訪れた。
その魔法使いは、シュロモと同じく不死鳥を飼っている。
魔法使いは、シュロモと同じく不死鳥を飼っている。
「君とはこうして、直接会って話しがしたいと思うておったよ、ミスター・シュロモ」
マーリン勲章勲一等。大魔法使い、大魔法戦士長、そしてウィゼンガモット会員及び主席魔法戦士。そして国際魔法使い連盟最高魔法指導者という華々しい肩書きを持つ、グレート・ブリテンでもっとも偉大な魔法使い。
「俺としても会って話がしたかったですが、こう言う形になるとは思ってなかったです、アルバス」
アルバス・パーシヴァル・ウルフリック・ブライアン・ダンブルドア。ホグワーツ魔

法魔術学校現校長その人が、半月メガネを奥で目を柔らかく細めて笑顔でシュロモを歓迎するのであった。
「さて、今宵はこの老いぼれに抗議したいことがあるようじゃの？　スネイプから聞かされておるよ」
　青い目で、シュロモをじっと見つめるダンブルドア。シュロモも、ダンブルドアから目を逸らさず睨み付ける。
「ホグワーツの警備体制について、厳重な抗議を。ハロウィンにはトロール、そして今日は競技用の箒を狂わされるほどの術者が校内にいることが判明しました。一体全体、警備はどうなってるんですか？」
「まったくもって耳が痛い話じゃの。じゃが、事態は儂の想定を超えておらん」
「……では明らかに教授として不適格な点があると知りながら、敢えて教授に雇用し、そのままでいると認めるんですね？」
「ほう。君が不適格と思う教授の名を聞かせて貰えるかの？」
　ここで初めてダンブルドアは目をすっと細めた。
　気のせいか空気が張り詰めている気がする。だが、シュロモから放たれている気迫も引けを取らない。
「……クィリナス・クィレル。図書室の利用履歴を遡ったところ、彼は学生の頃、相当闇

の魔術に傾倒していたようだしまず間違いないでしょう。彼がハリーの箒に呪いを掛けていたところをこの目で見ましたしね」
「正解じゃ。クィレルは休暇中にとあるモノと遭遇してもうての……そこからおかしくなってしまったのじゃ」
「彼を解雇するつもりは無いのですか？　その権限が貴方にはあるでしょう？」
「事態は儂の想定から外れておらぬ。それで手打ちにしてはくれないかの？」
「俺はアルバス、貴方を信じたからこそマクシームやカルカロフの誘いを蹴ってホグワーツに来たんだ。我らが一族と縁あるこの城で魔法を学ぶ為に。なのに、俺の信心に対しての返事がこれなら余りにお粗末ですよ」
怒りに塗れたシュロモの言葉に、ダンブルドアは眉一つ顰めることはなかった。
シュロモが本当は何に対して怒っているのか、知っているからだ。
「君が何を恐れておるのか儂には検討がついておる。その上で言わせてもらうがのシュロモ。君が恐れる事態は来ぬよ」
「その根拠を示せと俺は言ってるんですが？」
堂々巡りの問答に、苛立ちが抑えられず言葉に、明確な怒りが込められる。
しかし、半月メガネの老魔法使いは、若人の激情を穏やかに受け止めた。
「君が居るからじゃよ。彼女には、あらゆる危険から守ってくれる騎士が付いておる。

そして然るべき者以外に危険が降り注ぐことが無い様、儂が万全な準備と体制を整えたのじゃ。信んじられぬか？」

ハーマイオニーがどんな危険に遭おうと、シュロモが守ってくれる。

「亡き妹君に誓えますか？」

亡き妹、のところで一瞬ダンブルドアは息を呑んだが、

「君が大切に思うておる娘に、一切危険が及ばぬよう最善を尽くすことをアリアナに誓う。そして儂の名誉に懸けて君が命を落とすことが無い様に儂はあらゆる手を尽くそう」

「……魔法省に訴えるのは取り止めにします。それにハーマイオニーたちに漏らすのも。まったく、俺をアテにするなんてアルバスはどうかして……何がおかしいんですか？」

ハーマイオニーが無事な根拠に、シュロモをあげるなんてどうかしている。だが、ダンブルドアに認められてるようで嬉しくもあり、シュロモは複雑な気分になった。

ふと顔を上げると、にまにました顔でシュロモを見るダンブルドアと目が合った。シュロモが詰問すると、ダンブルドアは朗らかな笑顔を浮かべる。

「1年前から随分変わったと思っての。この世の全てを憎んでおった子が今は一人の人間の為に一喜一憂する、これほど好ましい変化はないじゃろう。しかし疑問じゃの。君

がミス・ハーマイオニーに並々ならぬ情を向けておることは食事の様子を観察すれば分かるのじゃが、どうしてそうも投げ打てるのか儂には分からぬ」

その言葉に、シュロモは衝撃を受けた。

まさか、スネイプ教授がダンブルドアに話していないとは夢にも思わなかったのだ。

「スネイプ教授、寮監から聞いていないんですか？」

「悲しきことにセブルスは儂に君の男女の機敏を教えてくれんのじゃよ。君が無鉄砲である等と言った愚痴なら良く聞くのじゃがのう」

「言葉を飾らずに言うのなら俺はハーマイオニーに恋をしました。彼女は、ハリーの友だと言う。ならば俺は、ハリーの側につく。……夜分遅くに押し掛けたお詫びに1つだけお願いを聞いて差し上げましょう。メルフォティートに出来ることなら何でも致します」

「ならば、彼を付け狙う邪悪な闇の魔法使いの手からハリーを守ってくれんかの？　その代わりと言っては何じゃが、儂も3つまで君の願いを必ず叶えよう」

シュロモはダンブルドアの言葉に、深く思慮を巡らせる。3つの願いを何にするか、ではない。

邪悪な闇の魔法使いと言った理由についてだ。

ダンブルドア程の魔法使いが「邪悪」と呼ぶような闇の魔法使いがクィレルの他に居

るのか。クィレルがそうならそうと言えば良いのに、何故ダンブルドアは「邪悪な闇の魔法使い」と個人を限定しなかった？

邪悪な闇の魔法使いは個人でない？　ハリー・ポッターを狙う闇の魔法使いと言えば、思い当たるのは死喰い人（デスイーター）だ。しかし、犯罪者、悪しき者がそう簡単に侵入出来るかと言うとホグワーツの魔法防御が万全なであるならば不可能である。

ともすれば当て嵌まるのは……。

まさかな、とシュロモは否定する。だが、もし予想が当たっていれば、なる程死喰い人（デスイーター）などと名付ける理由も分かる気がする。

「アルバス。ひょっとすると貴方の言う邪悪な闇の魔法使いとやらは、ヴォルデモート卿のことですか？」

シュロモの推測にダンブルドアは、表情を変えない。

「おっと、うっかりしてたらこんな時間になってしもうた。若き学生は流石に眠らねばならん時間じゃ。また次の機会にゆっくり話そうかの。シュロモ、有意義な時間じゃったよ」

だが、ウィンクした茶目っ気のある顔が、シュロモの推測が正解であることをこれ以上なく物語っていたのであった。

目の前が燃え上がったと思ったら次の瞬間。

シュロモは校長室でなく、湖の地下スリザリン寮の自室にいた。強制退室されたのである。シュロモはそのままゆっくりと深い眠りについた。